

さ
ま
よ
え

る
視
察
団

Yamanaka Tomotaka

山中 與隆

Duo-Yamanaka

さまよえる
視察団

山中與隆

目次

船出	1
出発の人々	25
出発	71
到着	102
上陸	132
視察はじまる	180

視察団員九人の死 262

視察の再開 286

子白鳥星離陸 334

第八宇宙ステーションで 342

行動する第八宇宙ステーション 378

混迷の地球に潜入 385

再び宇宙ステーションへ 431

人類滅亡へ 433

数十億年後の地球

登場人物一覧

編者あとがき

448

455

444

さまよえる視察団

山中與隆（やまなかともたか）

船出

「視察団の出発は一週間後です。皆さんはすでにこ

存知と思いますが、念のためここで目的地等について詳しくお伝えしておきましょう。すなわち、白鳥座第十六B星の第三惑星、通称「子白鳥星」。出発日は、西暦二千五百四十五年八月六日午前一〇時〇〇分〇〇秒です。乗船はその三時間前、つまり午前七時ちようどです。

搭乗する宇宙船は「ヒナギク号」です。視察団の皆様は、今回の出発点となる第八宇宙ステーション

ンにその前日、つまり八月五日中に入ってください。一人も出発に遅れることがないようお願いします。

三か月の長旅です、十分に宇宙を楽しみましょう。宇宙船は光速以上で飛びます。今回のコース取りでは出発後間もなく火星、木星、土星が間近に見えます。また、望遠鏡で途中さまざまな星雲も見えます。ですので、その都度ご案内します。また白鳥座のデネブとアルビレオもかなり大きく見えるはずですよ。

もちろん白鳥座というのは地球から見たときの星の並びですから、目的星が近づいたらその星座が見え始めるといふわけではありません。デネブは五十日目、アルビレオは七十日目ころ最も大きく見えるでしょう。そのほか流星群や、小惑星帯も見ごたえのある天体シヨウとなるでしょう。

それらのことよりも重要なことを確認しておきます。みなさんはすでに承知の上で視察団参加をされ

ているのですが、光速以上で移動している私たちに
とっては片道九十日、往復で百八十日の旅ですが、
子白鳥星滞在の百二十日を加えると三百日間地球を
離れることになります。その間地球上ではおよそ十
年が過ぎていくことになります。つまり私たちが戻
る地球は、約十年後の地球ということになります。
出発時に生まれたばかりのお孫さんが、帰って来た
ときには十歳になっているということです。また、

そのときの地球がどうなっているのかも楽しみで
す」

視察団からだけでなく、乗組員からもざわめきが
広がった。冒頭に挨拶したのは視察団長を務める四
十五才の国会議員、視察団員名ミスターYである。

ここは東京のある一流ホテルの大広間で行なわれ

ている視察団員の壮行式の会場である。

続いて、視察団の事務長を務める三十八才の政府職員ミスターTが説明を続けた。

「第八宇宙ステーション行きのシヤトル便のことですが、ご存知と思いますが、わが国からは穂高打ち上げ基地が、直行便が多く便利です。何処の基地を利用されてもかまいませんが經由ステーションの多い便は、思わぬ遅れが出ることがあるので注意して

ください。

それから、もちろん視察団の皆さんは、宇宙許可証はお持ちのはずですが、念のため期限切れになつていないか確認をお願いします。子白鳥星での視察については、皆さんは厳正な選抜を経ているので改めて許可証は必要ありませんが、宇宙ステーションまでは通常の許可証が必要です。期限切れや、期限切れ間近の方は、この説明会終了後に私のほうに申

し出てください。簡単な検査をして期限を延長いたします」

次に同行する四十二才の内科医ミスターWが立つた。

「今回の視察の目的地子白鳥星は、地球とほぼ同じ環境ですから、現地では何の心配もありませんが、何しろ七千五百光年の距離は、現在の技術をもつてしても九十日の飛行です。その間に宇宙病にかから

ないようにしましょう。それから、現地の到着地辺りの気温は日本の夏くらいと思ってください。人工的に季節をなくしたということですが、それがどういふものかも視察のポイントの一つです。

自然の生態系を守ってきた地球とはまったく違つた考え方で、むしろ自分達が住む環境を完全に改造しているという言い方が当てはまるでしょう」

最後に、二十五才の若い女性の国会議員ミズCが

立った。

「ご存知のように子白鳥星とは、宇宙交信による接触はすでに三百年以上前から行なっており、友好的な関係を約束しております。地球からの渡航は初めてですが、今回は、最初からいきなり民間ベースの渡航となるわけです。

なにしろ先方は、自分たちは地球人より一万年は進んでいると言っているわけですから、彼らから見

ると、われわれは太古の未開人なのかもしれません。今回の視察を申し入れるに当たって、相互視察を提案したのですが、先方は、地球については調べつくしたので、視察の必要はない。地球に学ぶことはなにもないと言っています。

われわれにしてみればちよつとカチンと来ますが、ここは押さえて、一万年進んでいるというのがどんなものなのか、ひとつ謙虚に見せてもらうことにし

ましよう。したがって、一応今回は子白鳥星人を大先輩として、対応することにしますのでよろしくお願いします。

彼らは、自分たちは人格的に完成されていると言っています。それが何を意味するのか、一切腹を立てたりしないということなのか、紛争というものがあるのか無いのか、武器というものがあるのか無いのか細かいことは行ってみないとわかりません。

とにかくこれまでの我々政府として接触した限りでは、好戦的な星人ではなさそうです。必要以上に恐れたり、へりくだつたりすることはありませんが、わからない点も多いので、そのつもりでお願いします。

言葉はまったく異なりますが、向こうには地球研究家が何人もいて、通訳をしてくれることになっていきます。残念ながらわれわれの側には子白鳥星の言

葉を話したり理解したりできる人間はいません」

さらに事細かな事務的な説明が続き、やっと終わって解散になったあとも、宇宙許可証の更新をする者が何人もいて、説明会は遅くまでざわざわと続いた。

今回のこの視察団は乗組員も含めてすべて日本人である。子白鳥星へ地球からの初の視察団を世界に

先駆けて日本から送ることになったのは、第十国際連合の決定による。理由は、日本が戦争をしないことを条文に持つ憲法を遵守し、先頭になって果たしてきた戦争のない世界への努力と、地球の環境保護への貢献が高く評価されていることによる。

五百年前に世界をリードしていたのは、アメリカであつたが、アメリカがすることはすべて正しいとして追隨する多くの国を従わせていた超大国は、

徐々にその独善性のために支持を失い、超大国主導の数世紀は終わって、その後混迷の世紀に入っていた。小国である日本がリーダー格として世界が認められるようになったのは、この二百年くらいである。その間に国際連合は第十次となっていて、現在のところこれまでに無いほど長く平和が維持されている。世界に冠たる日本の平和憲法、その第九条は、いまでは「キユウジョウ」と国際共通語となり、アメリ

カまでもが連邦憲章に「キユウジヨウ」項目を加えている。

ところが、いまだに地球上では、局地的な紛争はあとを絶たず、それこそが、戦争の無い星への視察の最大の課題のひとつとなつたのである。

地球環境についても、温暖化の危機が声高に叫ばれながら、現実には悪化の度を増し続けた。三百年前にはついに海面上昇で一国全部が水没する太平洋

の国が出現し、世界的な救援を受けてオーストラリアの一部に全国民移住をした。

その温暖化も太陽熱、風力利用などを推し進めて、改善に向かわせたのが日本の技術であつた。ところが、太陽熱、風力その他の再生可能エネルギーの利用が世界中に広まったために、温暖化ガスの排出は激減したが、こんどは地球温度の低温化が進みすぎるといふことに危機感を唱える学者が現れ、現在さ

かんに議論が続いている。太陽光線を世界中で膨大な数の発電板に当てるため、大地に届く太陽熱と、熱だけでなく太陽がもたらすさまざまな要素が減少することに危機感を募らせる学者がいるのだ。この点も、無季節化に成功しているという子白鳥星の現実を視察することは、これまた大きな目的である。

そして、いま地球上の問題で最大ともいえるのは、高齢化である。医療は驚異的な進歩を遂げ、人間は

めつたなことでは死ぬことは無い。いまや「病死」という言葉は死語になりつつある。病死しないから、人は年をとつても生き続ける。一方、肉体と精神の老化を止める医療が確立していないために、世界に百五十才、百七十才といった人間が溢れかえっている。最高齢は近年遂に二百才を越えた。しかも、子供を産める女性の年齢はいまだに一般的には四十才くらいまでと言われている。

生まれた子供はほぼ百パーセント成長して大人になるので、地球上の年齢構成は高齢側に偏っていくばかりである。

また、元気で意欲を持って働いたり活動したりするのは、平均的には六、七十才くらいまでというのも数百年来変っていない。

子白鳥星では、すべての人が六十五年の人生と決まっているという。それを実現している子白鳥星の

社会がいったいどんなものか、地球社会からは想像も出来ない。ところが、調査資料によれば、すでに二千年以上前からこのシステムが確立して、うまく機能しているらしいのである。

地球では百年くらい前から、事故や紛争の犠牲者以外はすべての人が老衰で生涯を終える。天災による犠牲者も多少あるが、天災の予知と防災の進歩により、その数は非常に少ない。いま地球人の平均寿

命は百七十才前後である。百七十年の寿命があつても、現役として働くのは六、七十年であり、趣味などで一応活発に生きる年数を入れてもせいぜい八十年。残りの九十年近くは、生ける屍のようにゆらゆらと蠢いて、大なり小なり介護の手を煩わせながらの人生である。税金の七十パーセントは、そのような高齢者の生活を支えるために使われている。国によつて多少事情は異なるが、世界中がほぼ似たよう

な状況にある。

地球では紀元前から三千年以上紛争で人を殺しあっている、紛争地域では若者が犠牲になるため、高齢者率はさらに高くなっている。

出発の人々

二千五百四十五年八月五日、第八宇宙ステーションには、男女十三人ずつ二十六人の子白鳥星視察団員が一人も欠けることなく勢ぞろいした。

視察団は、政治家、学者、医者、芸術家、スポーツマン、社会運動家、それに一般人などで構成されている。政治家はもちろん政治のシステムを視察するのが目的であるが、現地でのあらゆる交渉役も担っている。学者は人類学者、社会学者、都市、環境

などの専門家で、医者は視察団の健康管理も担当するが、現地では六十五才制度について詳しく調査する。今回は地質や宇宙学者など子白鳥星の星そのものの調査は含まれていない。

芸術家は音楽、美術、文学の専門家が加わっている。最高齢は百三十才と百四十五才の男女各一名、最年少は十才と十一才の男女各一名である。あとは十八才から四十五才の間に入っている。視察団員の

平均年齢は約四十才であるが、二人の小学生と、二人の高齢者を除くと平均は三十三才となる。

視察団員は男女同数である。便宜上二十六人にはアルファベットが付けられている。女性が一番若い小学生がA、あと年齢順に十三人目の百四十五才の小説家がMである。そして男性の小学生がN、男性最高齢の百三十才の人類学者がZである。

このように視察団には子供が二人だけ含まれてい

る。男女一人ずつの小学生である。彼らの記号はミズAとミスターNである。

二人は全国から応募した中から抽選で選ばれた。抽選は無作為に行われたので、選ばれたのは特に優等生とか何か特技があるということではなく、ごく普通の十才と十一才の子供である。

採用にあたっては健康であることと、家庭から離れて他人の中で生活することに耐えられることとい

うのが唯一の条件となっている。それで視察団に加わりたいと志願した子供たちから選ばれたのである。自分達の子供を送り出す親にとっては、およそ十年間子供が不在になるということになる。

実際に選ばれた二人は、はきはきとした賢そうな子供である。女の子は小さいときから算盤を習っており現在三段の腕前だそうだ。男の子の方は、元気いっぱいのサッカー少年である。子白鳥星の子供達

とサッカーがしたいと言つて、サッカーボールも携帯している。二人ともごく普通のサラリーマン家庭の子供である。

次に若いのが、十八才の女子体操選手で記号はミズB、オリンピックの金メダリストである。競技生活から離れることになるが、宇宙船ヒナギク号にはトレーニングルームがあり、太陽系を離れて超光速飛行に入ったら、地球にいるときと同じようにトレ

ーニングが出来る。彼女は、金メダルの褒美として視察団に誘われた。競技生活とどちらを選ぶかで相当迷ったが、子白鳥星でも演技のチャンスがあると聞いて、この人類史上稀有の機会を選んだのである。ヒナギク号の船内では、視察団員すべてが水泳を含む、健康維持とリクレーションのための運動が出来るようになっていた。

同じく運動選手の二十二才の男性は、千五百メー

トルの世界記録を持つ水泳選手である。記号はミスター・O。彼にも競技生活の問題はあつたが、彼の場合これを機会に競技生活から引退する決意をしての参加である。彼も子白鳥星で水泳するといふ体験を楽しみにしている。それから船内で視察団員の運動不足解消のための水泳の時間があり、彼には、そのインストラクター役が任されている。二人の運動選手は独身である。

二十五才の女性国会議員ミズCは、冒頭で出発時の挨拶をしたときに紹介した。高齢者が占める割合の多い国会で最年少議員である。現在は野党の切れ者として注目されている。超党派でこの視察の計画を中心になって作り上げたひとりで、これまでに子白鳥星との折衝にも当たってきた。美貌の独身女性で、恋人と別れての旅行である。その恋人というのも視察団に応募したが、選に漏れたのだった。

視察団にはもうひとり国会議員がいる。冒頭に挨拶した視察団長ミスターYである。彼は四十五才で現与党の大物である。次期首相の噂もあつたが、彼はこの視察にすべてを賭けた。超高齢化、低温化、地域紛争など何百年も解決していない課題の突破口をひらく糸口を得ることをこの視察に期待している。

医者には四人いる。女性が、二十六才の外科医ミズDと四十三才の歯科医ミズL。男性は三十四才の精

神科医ミスターRと四十二才の内科医ミスターWである。彼らは子白鳥星の医療に多大な関心を持っている。というのは、地球の医療は天井知らずの進歩を遂げているが、いまそれは「本当に進歩といえるのか」という疑問にぶつかっているからだ。確かに人間は病気で死ななくなった。けがをしても、殆んど脳や心臓を含めて体のどの部分を損傷しても生きながらえることが出来るようになった。昔は臓器が

悪くなつたら、他の人間の臓器を移植するというのが常識であつたが、脳も含めて人間のあらゆる部位が本人の細胞を使って再生する事が可能となり、日常的に行われている。

しかし、老化だけは防ぐことが出来ず、死ななくなつた人間は、長寿は得たものの、ただ老いの長いながい日々を送るだけの人生をもたらされたのである。何のための長寿なのかわからなくなっている。

いってよい。

ある国で、秘密の実験として百才の老人のすべての部位を内臓から皮膚にいたるまで、細胞から作った最新の臓器に取り替えた人間が造られたことが表ざたになつたことがある。実はこの実験では、本人の万能細胞ではなく、ある若者の細胞から取替え用の臓器が造られたのだ。しかし、なぜか若者の筋肉、皮膚、内臓、脳を貰つたはずの彼は、その若々しい

外見にもかかわらず、百才の精神しか表さなかつたのである。

ところで、今ではすべてを人造部位ばかりでひとつの固体を作り上げること出来る。心臓も動かせるし、脳も神経も機能させることが出来るのに、そのようにして造られた人間は、何故か生きた人間として活動しないのである。つまり植物人間状態以上には出来ないのである。したがって、いろいろなこ

とをさせる人間型の機械は、結局ロボットしかないのである。

昔ある時期クローン人間が出来るのではないかと注目されたことがあったが、羊やねずみでは出来ても人間では、倫理的にはなく、なぜか技術的に出来なかつたのである。人間に命を付与しているのは何なのかという問題の不思議さは進歩した現在の科学でも解明されていない。もしかしたら、クローン

が出来た羊やネズミも、外見はそれらの動物であつても、実際は羊でもネズミでもない生き物のようなものなのかもしれない。

地球人よりも一万年進んでいるという子白鳥星人が、六十五才制度を厳密に守っている理由がこのあたりには潜んでいるようにも思われるのである。

もちろん四人の医師は、そのような視察の目的のほかには旅行中、視察団員と乗組員の健康管理の任務

も担っていることは先にも触れた。

芸術家達を紹介しよう。まず二十八才の女流抽象画家ミズE。早くから誰も思いつかないような発想の彼女の絵は注目を集め、いま地球上で最も売れている画家といわれている。その発想のあまりの奇想天外さは、彼女のことを宇宙人ではないかと信じて疑わないファンがいるほどである。人気の画風は、直ぐに真似するものが現れるものだが、彼女の場合

は発表された絵の真似は出来ても、発想の傾向を真似することは誰にも出来ないといわれている。子白鳥星の絵画と彼女の描く絵との対決が、今回の視察の大きな興味の的になっている。

二十八才の美人バイオリニストはミズF。世界で一番忙しい演奏家といわれていたバイオリニストである。実は彼女は、音楽大学在学中に地球上で最も権威あるとされているバイオリンコンクール、「ルカ

コンクール」に優勝して一躍世界の注目を集め、その美しい容貌と相俟ってたちまち世界の人気者になった。しかし、彼女は自分の左手の形がバイオリニストにとって理想的でないことに悩んでおり、コンクールのあと、大きな決断をして左手を人造のものに付け替える手術をした。このような超一流のバイオリニストの左手という精巧な人造部位は、不可能ではないかと心配されたが、超一流の外科医の精魂

込めた製作と手術によつて成功したのだつた。一般に使われている人造の手は、コップを持つとかドアを開けるとか、衣服を着たり脱いだりすると言つた日常生活をするには十分役に立つが、バイオリニストのような仕事をする手には、一般普及品では役に立たない。しかし、それは普通の人には手も足も出ないほど高価なので、出来ることなら自分の頼りない手を付け替えたいと願うバイオリニストは五万と

いるだろうが、その天文学的な価格と、必ずしも低いとは言えない失敗のリスクと相俟って、これまでに挑戦した者は、彼女以外誰もいない。

彼女はルカコンクルの優勝者にのみ与えられる、世界に五十挺しかないといわれている歴史上最も美しい名器ルカを買う権利を捨てて、手の手術に賭けたのであった。

名器ルカは、金さえ積みば買えるものではない。

ルカコンクールに優勝しても、それは無償で与えられるのでもなく、自ら金を出して買わなければならぬ。その金額は人口二万人程度の町の年間予算に相当するといわれている。

彼女の手術を手がけたのはすでに紹介した二十六才の女性外科医ミズDであるが、その外科医が視察団に参加しているのはまったくの偶然であつた。彼女たちは、視察団員が集合したときに初めてそのこ

とを知つて喜び合つた。

余談になるが、ルカコンクールは十年に一度しか開かれない。参加資格は問わないところから、名器を手に入れたいために、すでに名を成した大家まで参加するので、新人が優勝するチャンスは皆無に等しい。その難関を彼女の年齢で優勝したのは、このコンクール二百年の歴史で二度目という快挙であつた。優勝者は、仮に巨額を払つて、名器ルカを購入

しても、その後十年間の演奏活動を評価されてルカ委員会の審査に適わなかった場合は、せつかく手に入れた楽器を、買ったときの価格で買い戻されてしまうのである。ちなみに、コンクールの賞金は権威あるコンクールにふさわしいものだが、名器ルカを買うには十分でない。優勝者たちは、よほどの金持ちでない限り、スポンサーを見つけて憧れの名器を手に入れるしかないのである。そうして手に入れた

楽器による演奏は、殆んどの場合まちがはなくそれまでの演奏をはるかに超えた感動を聴衆に与えてきた。演奏家として、一度は手にしたい夢なのである。

二十九才の人気俳優ミスターQは、持ち前の演技力でも評価はされているが、むしろ不倫問題などで常に話題を提供していることで有名である。中高年の女性への人気は圧倒的に高い。

四十才の作曲家ミスターUは、先の抽象画家ミズ

Eの場合と違って、彼はむしろ伝統的な、というより七、八百年も昔のバッハ、ベートーヴェンといった人たちの作風で作曲して人気を得ている。それらの作品は、十九世紀から二十二世紀ころまで三百年以上にわたって流行を続けたが、その後三百年以上省みられなくなっていた。残されているその膨大な作品は、埃をかぶった退屈極まりない博物館的価値以外何も見出せない。しかし、それらの作風を使い

ながら、新鮮な生命を吹き込むことに成功した彼の音楽は、新しい作品が発表されるのを常に待たれてゐるといふ。彼の作品が子白鳥星人の耳にどう響くのか興味を尽きない。

視察団には小説家が二人いる。百四十五才の女流小説家ミズMは過去の名作の現代語訳で有名であるが、彼女のオリジナル作品も若い世代を含めた広い年齢層に読まれる人気作家の一人である。彼女は、

自らの創作力の衰えを感じ始めた九十才のときに脳
の入れ替え手術をしている。彼女はその手術に永年
の著作で得た巨万の富のすべてを賭けた。彼女は富
だけでなく、もちろん才能そのものもその手術に懸
けたのである。いかに特注の高性能な脳でも、才能
が新しい脳に完全に継続されるといふ保証は無かつ
たからである。

それでも彼女は踏み切った。入れ替え前の脳にあ

るすべてのデータを外部の巨大な人脳型ハードディスクに一時保存し、新しい脳を移植後、そこに読み込んだのである。一時保存され、再び脳に戻されたデータは九十才のデータである。それは彼女が創作力の衰えを感じ始めたというときのデータである。それがそのままコピーされて、彼女が求める新たな創作力が得られるものなのか誰にもわからなかった。彼女自身は若い機能を持った自分の新調した脳を持

つてすれば、衰えかけたものをリフレッシュできると考えたのであつた。

彼女によると、手術後創作を再開したときは、手術直前と何も変わらなかつたが、その後新たに得た知識や経験を発展させる力が、若い頃経験したのと同じように大きく広がっていくと語っているから、手術は成功したのである。その証拠に手術から五十五年経つた百四十五才のいまも創作力に衰えを見

せず、精力的に作品を発表し続けているのである。彼女は子白鳥星人の人生を取材する意気込みに燃えている。

この女流作家の視察団参加は、男性で百三十才の人類学者ミスターZとともに、高齢者の代表としての参加である。

もうひとりの小説家、四十五才の男性ミスターXは、社会派の作家でしばしば討論会などでメディア

に顔を出しているので広く知られた存在である。彼は現在の超高齢化状態を非常に問題視しており、安楽死を賛美した小説『極楽薬』を発表したが、姨捨思想だとして世間から非難を浴びた。子白鳥星の六十五才制度はまさに彼の最大の関心事なのである。

三十六才の環境研究家の女性ミズJ、四十才の社会学者の女性ミズK、四十二才の都市研究家の男性ミスターVと百三十才の人類学者ミスターZの四人

は言うまでもなくこの視察の目的そのものを担った
専門家たちである。

三十三才の農業従事者の女性ミズIは現在すでに
始まっているといわれる地球の低温化に警鐘を鳴ら
している一人で、彼女の持論は人類にとっては大変
ろ温暖化のほうが好ましいというものである。

温暖化は人類の努力で止められるし、止められな
くても進行を遅らせる余地はあったが、太陽熱を直

接大地に吸収させることを妨げている今の太陽熱利用の行き過ぎは、取り返しの付かない危険をはらんでいるというのである。

四十才の女性社会学者ミズKは、超高齢化によって全地球は幽霊屋敷化してしまったと主張する。彼女もどちらかと言うと、『極楽薬』の小説家ミスターXと似た考え方をしている。

四十二才の都市研究家の男性ミスターVは、交通

手段が発達して、日本国内であれば誰でも、たとえ山間部に住む高齢者でさえも、カプセルに乗りさえすれば、全国の何処にでも殆んど一時間以内で行くことが出来る。しかもカプセルは十五才以上の国民にはすべて無償で支給されているのである。そのような、自由に何処にでもいける時代になっているのだから、特定の都市に社会機能が集中する必要はないとの考えに基づいて、都市の解体の考え方を推し

進めている実践家である。

百三十才の人類学者ミスターZは、高齢だが現役で大学の教授を務めている。彼は最近自分が勤めている大学の二十一才の女子学生と結婚したことで話題になった。その新妻がまもなく妊娠したことから、彼は生殖機能一式を最新の人造品に取替えたとの噂がメディアで盛んに取り上げられた。

人造生殖器は、安価とはいえないが多くの高齢男

性が移植手術を受けている。生産が間に合わず、オーダーしても二年待ちといわれる繁盛振りである。しかし、一般に使われているものは、生殖器とはいっても実際に子供を作ることには、奇形があまりにも多いことから禁止されており、女性を妊娠させる機能は備えていない。したがって、いまではもっぱら性行為を楽しむためのものとして使われている。

しかし、一部の裕福な者は、特に老人が多いのだ

が闇で超高級なセットを移植して、子供を作り一応その子供が一人前に育つ例があるため、そのようなもぐりの移植手術もあとを絶たない。このミスターZの場合もそうだというのはあくまでも噂であるが、噂はまことしやかに囁かれている。

なお、若い夫婦の不妊が完全に治療できる現在は、普通の夫婦が高価な生殖セットを移植する必要はない。

前出の三十三才の農業従事者の女性ミズIと、二十五才の漁業従事者の男性ミスターP、二十九才のオフィスレディミズGと、三十六才の会社員ミスターSとその妻で三〇才の専業主婦ミズHはそれぞれ一般の社会人の立場で視察団に加わっている。

三十三才の農業従事者の女性ミズIについては、地球寒冷化に警鐘を鳴らしているとしてすでに紹介したが、彼女は大規模農産物工場の三代目社長であ

る。一方二十五才の漁業従事者ミスターPは、父から譲り受けた漁船一隻で暮らしを立てている零細な一漁師で、今回の視察団には会社勤めの夫婦とともに抽選で当たったメンバーである。

最後に、マネージャーを務める三十八才の政府職員ミスターTは、高級官僚の一人でやがて政界に進出するだろうと目されている。

次に、三十人の乗組員たちについても触れておこう。乗組員は視察団のメンバーではない。もっぱら宇宙船を正確かつ安全に運航する任務と視察団の船内生活を維持する仕事を担っている。簡単に言えば、炊事、洗濯、清掃も彼らの役目である。

視察団員は、子白鳥星滞在中も、基本的には船内で起居するので、事実上二百七十日間の使節団メンバー二十六人と乗組員三十人の生活の場はこの宇宙

船ヒナギク号ということになる。

その意味でも乗組員に課せられた任務は非常に大きいと言える。しかし千人もの金持ちたちを一年以上も生活させる巨大客船による地球上のクルーズが何百年も繁盛していることから見れば、総勢六十六人のクルーズなどかわいいものである。ただ宇宙の果てまでの旅と、地球上の七つの海を周る旅とでは、そのリスクだけでなくすべての点でまったく異質な

旅行なのである。先にも述べたように、帰宅を待っている視察団員と乗組員の家族にとつてはおよそ十年の期間なのである。

さて、乗組員であるが彼ら彼女らは一番から三十番までの番号で呼ばれる。一番から十五番までが女性、十六番から三十番までが男性である。ここでも男女同数とされた。それも男性が運転など技術的な役割、女性が炊事洗濯や清掃といった役割とといった、

今も地球上でありふれている男女の役割分担は、ここでは一切行われていない。運転に関する部門に男女五人ずつ、その他に十人ずつというふうに分けられている。ただしこれは男女五人ずつがローテーションされる。つまり乗組員全員があらゆる仕事をこなせるようになっていたのである。

それと、宇宙船では乗組員だけが清掃をしたりするのでなく、視察団のメンバーもそれぞれ自分た

ちの生活エリアを当番制で清掃したりすることになつてゐるから、六十六人全員が共同でひとつのコミユニティーを作つてゐると考えることが出来る。ただし、子白鳥星に滞在中は、視察団員たちはそれぞれの調査活動に従事するため、船内での役割分担は変わる。

乗組員の年齢は若く、船長を含めて全員が三十代である。

出発

いよいよ出発である。第八宇宙ステーションには、五隻の巨大な宇宙船が着いていて壯観である。宇宙ステーションに近づいたとき、視察団員たちはその姿に見とれた。そのなかに船体全体に大きくヒナギクの絵が美しく描かれた宇宙船があるのも確認できた。

視察団員たちは、出発の三時間前に全員宇宙船ヒナギク号に乗り込んだ。宇宙ステーションまで見送りに来ている家族や友人などとはこの段階で別れることになる。その中には、これが永久の別れとなるかもしれない高齢の見送り家族の姿もあつた。

視察団二十六人には全員個室が割り当てられている。ただし専業主婦ミズHと会社員ミスターS、歯科医ミズIと内科医ミスターWの二組の夫婦は二人

一室とされている。

地球から宇宙ステーションに出発するときほどの衝撃はないが、太陽系を抜けて超光速に加速されるまではそれぞれの部屋で、ベルトをつけていなければならぬ。どの部屋にも大きな窓があり、太陽系の惑星の見事な眺めが楽しめる。

ヒナギク号は、二十六人の視察団員と三十人の乗

組員を乗せて、西暦二千五百四十五年八月六日午前
一〇時〇〇分〇〇秒、定刻に第八宇宙ステーション
を離れた。七千五百光年彼方の白鳥座十六B星の第
六惑星、通称「子白鳥星」を目指して九十日の飛行
が始まったのである。

出発後間もなく火星が遠くに見えてくる。みんな
はベルトに体を固定したまま、備え付けの二千倍望
遠鏡で覗くことが出来る。テラフォーミングによつ

て開発されつつある火星表面が手に取るように見える。大きな建造物だけでなく、工事のために動き回っている大型のトラックなどまで確認できる。しかしそういったこまごましたものよりも、火星の極にかぶさっている極冠が太陽の光を受けて白く輝いているのが感動的であった。宇宙ステーションからよく見えていた地球は、すでに遠く、望遠鏡でも青っぽい小さな球にしか見えなくなっていた。

次にみんながそれぞれの部屋で驚きの声を上げたのは窓いっぱい迫る木星であつた。木星の「一目」のような渦巻き模様が不気味な赤茶けた色で見物人たちを睨んでいるように見える。ヒナギク号はこの後、木星と土星の引力を利用しながら速度を速めて太陽系を飛び出すのである。

まだ木星が見えているうちに土星の、鋭利な縁を持った美しい色合いの環が近づいてきたが、あつと

いう間に後方に飛び去った。窓の外には、真つ暗な宇宙の中に無数の星が近く遠く浮かんでいる。星たちは実にさまざまな色をしている。列車の窓から外の景色を見ているときのように、比較的近くの天体は速く、遠くの天体はそれよりもゆっくりと後方に動いている。ヒナギク号は超光速で進んでいる。

部屋のランプが、ベルト解除を示した。これからヒナギク号の船内を自由に行動できる。出発から

三十分が過ぎている。船内放送があり、自由行動の案内と、一時間後からレストランも営業が始まるということである。営業とはいっても、食事はすべて無料で好みのものが食べられる。宇宙時代が始まった頃は、いわゆる宇宙食が主な食事であり、排泄物は最小限になるようにされて、宇宙服の中のある場所に保管されて地球まで持ち帰ったそうであるが、いまヒナギク号の船内は、地球上の豪華客船に乗っ

ているのと同じで、宇宙を飛んでいるという特別な感覚はまったく無い。無いというより、乗っていることを感じないようになっているといえるのが正確であろう。地球上と同じ程度の重力も与えられているのだ。

食事時間などは決められておらず、船内での生活は殆んど自由行動である。ただ、医療関係とか社会学関係などそれぞれの分野で視察の内容についての

準備会議が随時開かれるので、関係者はそれらに参加することが義務付けられている。

またすべてのメンバーは、健康管理のため毎日の運動と、医師の健康チェックが義務付けられている。いずれにしてもこれから約九十日間の長旅である。

クイーン・エリザベス二世号以来五百年以上経つた今でも、ちょうど今回の飛行と同じような八十日とか九十日間、時には一年間といった世界一周クル

ーズが人気で、愛好者が絶えない。世界中が何処でも日帰り可能になった今だからこそなのか、愛好者はむしろ増えているのである。世界一周クルーズを舞台にしたさまざまな人間ドラマをシリーズで書き続けている百四十五才の女性作家ミズMは、

「この旅行は、とびつきりわくわくするものだが、それは目的地在未知の世界だからですよ。しかし、真つ暗な空に星が点在するだけの風景を九十日間眺

めなくてはならない道中は、頻繁に世界の港に立ち寄る世界一周クルーズの魅力にはかないませぬわね。でも地球上のクルーズもこの宇宙旅行も最終的な帰着点が生活の垢にまみれた自分の家だということところが、いかにも幻滅ですよね」

と、食事でテーブルをともしたメンバーに語るのだった。

実際にそのような豪華客船のクルーズを何度も経

験している彼女には、それにまつわる話題は事欠かず、ノンフィクションなのかフィクションなのか區別がつかないような面白い話が尽きないので、彼女が食事に現れると、何処からともなく同席しようとするメンバーが集まってくるのだった。

そんな彼女と絶対に同席しようとする人物がいる。百三十才の人類学者ミスターZである。高齢者モデルとして百四十五歳の女性作家ミズMと乗船し

たにもかかわらず、彼女と高齢者として同列視されることを嫌っているのである。レストランが混んでいて他に席がないときには、食事時間をずらせてでも同席しないようにしている。

骨の髄から伊達男の彼は、いつも洒落たフアツシヨンで船内を歩き回っている。高級生殖セットを移植して精力絶倫を誇っていると噂の彼だが、残念ながら容貌は百三十才そのものである。ある国の百才

の男のように外観を若返らせることは、彼なら経済的になんでもなかつたはずだが、それを彼は主義の上でやらなかつた。人類学者としてのプライドなのである。ひとりの人間としてこの世に生を受けたものが、誰であるかわからなくなるような整形をすべきではないというのである。したがって彼は、些細な整形手術も否定するのである。骨が皮を被って歩いてゐるような、まさにミイラが生き返つたような

彼が、目だけはぎらつかせてピチピチの体操選手に近寄っていく姿などは、不倫などにはまったく寛容な人から見ても、決して見よいものではない。

当の十八才の体操選手ミズBは毎日午前中に四時間トレーニングルームで練習していた。百三十才の人類学者ミスターZは、殆んど毎日トレーニングルームに入り浸って彼女の練習を見ている。それだけならいいのだが、彼女がちよつと汗を拭くためにイ

ンターバルをとると、スツと近づいてその日の調子を聞いたり、自分が先のオリンピックで彼女が金メダルをとったときの演技をいかに熱心に応援していたか、優勝したときにどんなに感激したかを話したりするのだった。彼女はファンやマスコミに見られることに慣れていたので、彼のことをファンのひとりとして、握手を求めるところくらいまでは応じていた。しかし、あまりのしつこさにたまりかねて、

練習に差し支えるからと丁重に言葉を選んで、フロアに下りないように言ったのである。彼は、わかつた、迷惑をかけてすまなかつたと言つたとたん、こともあろうに彼女を強引に抱き寄せ腰を密着させながら接吻しようとした。ちようどそのとき、宇宙船のスタッフが入ってきた。スタッフは逢引の場に出くわしてしまったのかと思つたのか、

「失礼」

と言つて、部屋を出ようとした。そのとき彼女が、

「何するのですか」

と大声を出したので、

「大丈夫ですか」

と声をかける。ミスターZはミズBを放し、スタツフが入ってきたのとは別の入り口から足早に出て行った。それ以来ミスターZはミズBが練習中のトレーニングルームに姿を現さなかつたが、今度はスタ

ジオで練習している二十八才の美人バイオリンスト
ミズFを毎日見に行くようになった。スタジオは防
音室になっており、許可を得たもの以外中に入れな
いようになっていゝる。見学者は防音ガラスの外側か
ら中のようにすを見ることになる。中で練習している
音は、廊下に備えられたヘッドホーンで見学者も聞
くことが出来る。彼女のヴァイオリンが聞けるとい
うので、見学者は件の人類学者以外にもちらほらあ

ったが、彼女が練習している時間いっぱい見続けているのはミスターZだけであつた。

彼女の練習は休憩を挟みながら数時間も続いた。普通音楽ファンはドレスを着飾って舞台上で演奏する姿にしか接する機会はないが、ときにはタンクトップにぴっちりしたショートパンツといったラフな格好で、惜しげもなくその魅力的な肢体を見せて、また惜しげもなく世界第一級の音楽を、しかも普通な

らヴェールに包んでおきたいと思われる音楽作りの現場を通りがかりの見学者に見聞きさせているのである。ミスターZならずとも、いつまでも見ていたい姿ではある。

人類学者ミスターZは、高齢者の代表として視察団に選ばれたとき、二十一才の新妻との同伴参加を希望した。そのためなら高額の寄付金を出すとまで言ったらしいが、人数枠が限られた中では認められ

ず、ひとりでの参加となつたのであつた。船内での彼の行動は、高級生殖セットの移植を裏付けけるものとみなに見られることになるのだつた。

快適に過ごせるように工夫された船内ではあるが、なにしろ空間もつき合わせる顔も限られた中では、たちまち退屈し始めるメンバーも少なくなかつた。そんな中で流行りかけたのがカードによる賭け事であつたが、全員が限られた所持金しか持たずに乗船

しているので、ブームとなる前に立ち消えになった。結局、音楽家は音楽の研鑽を続け、運動家はトレーニングに精を出した。研究家たちはそれぞれの研究テーマを掘り下げることと時間を使うことに戻ったのであった。

そろそろ本当に何事にも飽きはじめたころ、はるか前方に目指す子白鳥星が二千倍の望遠鏡で確認で

きるようになり、それが日一日と大きくなってくるので、みなに関心は大いに高まった。到着の十日くらい前になると、各船室にあるのとは桁の違う倍率の超望遠鏡によつて船内ホールの大スクリーンに、刻々と近づく子白鳥星の様子が映し出された。

子白鳥星の大きさが地球から見た月くらいになると、画面にまず現れたのは、その前面に見える大小二つの衛星であつた。時間がたつとはじめ見え

ていた二つの衛星は子白鳥星の陰に隠れ、反対側から先の二つよりも一段と大きな衛星が現れた。子白鳥星には三つの衛星があることはみんな知らされていたが、宇宙空間に浮んだ状態でゆっくりと自転する子白鳥星の周りを、知識として知っている通りに三つの衛星が回っているところを見て、みんな感嘆の声を上げたのであった。

子白鳥星は白鳥銀河の中にあまり大きくない太陽

の周りを公転する七つの惑星のひとつで、地球と同じに太陽から三つ目に位置している。公転周期は地球時間で計算すると二百九十二日、自転の周期は十九時間ちよつとである。つまり、地球と比べると、一年も、一日も約二割短いのである。

三つの衛星を地球人は、大きい方からスワン一号、スワン二号、スワン三号と名付けている。

やがて陸地や海らしい地形や、雲といったものま

で地球と似た感じの星であることがはつきりと見え始めた。ただ、宇宙基地から地球を眺めると、そこには地球儀を見るような見慣れた大陸の形などが見えるのだが、いま見え始めた子白鳥星の陸地や海の形状は、地球とはまったく違っていた。陸地と海の境界線はよく「地図のような」と言われる不規則な曲線ではなく、すべて地球の埋め立てられた港湾か造成地を見るような直線になっているのである。そ

れが地平線の向こう側に見えなくなるまで続いていく。これを、視察団のメンバーたちはすでに無人探査機の映像のニュースや宇宙雑誌で何度も見て知っていたし、それが人工的な巨大工事によつてもたらされたものであることも知っていた。しかし、現実には目の当たりにするとさすがにそのスケールに驚きを禁じえないのだった。

それは五百年以上前に、人類がはじめて宇宙から

見た地球の姿を人工衛星からの写真で見たときの驚きと同類のものであった。

到着の五日前になると都会のようなものが見えてきた。都会といっても東京を空から見るのとはまったく違って、確かに建物らしいものが無数にあるのだが、それらはすべてレンガ色をした石油タンクのような円形で、ほとんどが同じ大きさなのだ。メンバーだけでなく乗組員たちもこの情景にしばし

見とれていたが、このころから到着の準備が忙しくなり、ゆつくりスクリーンを眺めているわけには行かなくなつた。

実はこのあと、誰も見なくなつた大スクリーンには、赤茶けたクレーターだらけの巨大な地殻が大写しになつたのである。

宇宙船ヒナギクがスワン一号衛星の近くを通過したときである。そのときの大スクリーンの映像を見

た者はなかつたが、メンバーたちはそれぞれの部屋で、窓が赤茶色に輝く瞬間を体験したのだつた。

到着

着陸の一時間前に船内には安全ベルト装着の放送が流れ、それぞれ宇宙基地出発のときと同じように、

所定の席におさまってベルトをつけた。まもなく大気圏に突入する軽い衝撃があり、やがて窓の外が灼熱色に輝きだした。ヒナギクの外部表面が子白鳥星の大气との摩擦で灼熱しているのである。その光は猛烈な勢いで後方に吹き飛んでいる。まもなく逆噴射によって急速に速度を落とし最後は巨大客船の接岸のようなゆっくりとした着陸を果たした。

子白鳥星には、宇宙基地を経ないで直接、子白鳥

星最大の都市近郊の宇宙港に軟着陸したのだ。

子白鳥星の 대기圏に入ってから続いていた轟音は止んだ。エンジンが止まったのだ。再び船内はこの九十日間続いていた船内環境を維持するための低い機械音が聞こえ始めた。

ヒナギクは無事着陸したが、まだベルト解除のアナウンスがない。

視察団員たちはそれぞれの部屋で、ベルトをしたまま

ま窓の外の初めて見る風景を見ていた。レンガ色の
だだっ広い地面が遙か彼方まで続いていて、その先
に緑の森のようなものが続いている。備え付けの二
千倍望遠鏡で覗くと、やはり森のようである。しか
しそこに生えている樹木は、地球で見慣れた樹木と
はまったく違っていた。まず木の葉と思える部分が
巨大である。それは地球上の熱帯地方で見られるあ
る種の大きな葉の比ではない。いずれ近くで見ると

とができるだろう。ただ葉の色は地球と同じような緑色をしている。

足元のレンガ色の地面は、土なのか舗装なのかよくわからない。とにかくきれいに平面になっている。少しレンズを動かしてみると、かなり離れたところに黒っぽい宇宙船のようなものが停まっている。その周りで何か動きがあるようなので望遠鏡の焦点を合わせると、人が動き回っているようだ。人がその

宇宙船のようなものからぞろぞろと降りてきている
みたいだ。降りてきた人は、宇宙船の後ろ側に歩い
ていく。よく見ると、宇宙船の後ろに半分姿を見せ
ているボールを伏せたような形の中に吸い込まれて
いく。彼らは、人間と同じように二本足で歩いてい
るが、どうもスマートとはいえない。ここからは
大きさがよくわからないが、チンパンジーかゴリラ
を想像させるスタイルをしている。だが、裸ではな

く何かを着ている。それもみんな同じ銀色である。

やがてその人のようなものの動きが途切れると、ボールを伏せたものが、スーッと滑り出し、たちまち速度を上げて視界から消えた。彼らは、この子白鳥星の別の場所からやって来たこの星の住人なのだろうか。それともここは宇宙港と聞いているから、彼らもどこか別の星から来た視察団なのかもしれない。視察ではなく観光旅行にやってきたのかもしれない。

ないし、いやビジネスのために来た人たちの可能性もある。何しろわれわれ地球よりも一万年進んでい
るといふのだから何があってもおかしくない。

ようやく船内放送が流れた。

「視察団の皆さんは、ベルトをはずして、それぞれの記録メディアだけを身につけてホールに集まって
ください」

視察団員たちが五分後にはホールに集結した。みんなはいよいよ下船が始まるのかと緊張と期待が入り混じった気持ちでいたが、それはもう少し先のことであった。下船の前にヒナギクの船内すべてを、殺菌するのだそうだ。

いきなりホールの天井にある換気口からシューツと音がしたかと思つたら、無臭のややひんやりした風が視察団員たちのところまで流れてきた。そのま

まじつとして指示されるようにみなその場に立ち尽くしている。みな緊張しているのか口を聞くものはいない。シューツという音はいつまでも続いている。見ると、ホールの入り口は開け放たれている。流れ込んでくる風のようなものを、船内の隅々にまで行き渡らせるためだ。それが十分間も続いたところ、突然音は止まった。乗組員の一人が、視察団員たちに言った。

「これで船内すべての殺菌がすみました。皆さんはこれから地球時間で十八時間後に下船することになります。それまで船内でくつろいでください」

続いて船長が話し出した。

「皆さん、九十日間お疲れ様でした。おかげさまでこれといったトラブルもなく無事子白鳥星に到着しました。これから約四箇月間の視察が始まります。皆さんが十分に目的を達せられますようにお祈りし

ております」

船長がそこまで話したとき、百四十五才の女流作家が質問した。

「ここまで来たら一刻も早くこの星に降り立ちたいのに、どうして十八時間も待たなければならぬのよ？」

それには、先ほどの乗組員が答えた。

「さきほど皆さんも船内も殺菌しましたが、この後

十八時間に皆さんの体に何も起こらなかつたら下船が出来るのです。もし誰か一人でも異常者が出たら、もう一度殺菌をやり直すことになります。どうぞご理解ください」

今度は四十二才の男性内科医ミスターWが聞いた。「それは、さっきの殺菌剤が効かない種類の菌を誰かが持っていたらということですね」

「そうです。たいていは一度で完全に殺菌できるは

ずですが、万が一体内のどこかに殺菌できなかつたところがあればということですよ」

それを聞いた視察団員からは、さっきの無味無臭の気体が体内の隅々まで入っていったのかという驚きのささやきが起こつた。

ミスターWがもう一度質問した。

「異常というのは、どのようなことが考えられるのですか」

「今のところ特に自覚症状のようなものはないと聞いております。ただ皆さんには十五時間後に、こちらの検査機を通ってもらいます。それで殺菌が完全かどうかわかることになっています」

見ると、いつの間にか空港の身体検査ゲートのよ
うな形の機械が置いてある。

「この機械は先ほど着陸後に、皆さんがまだベルトをして待機しているときに、ここ宇宙港の職員が持

ち込んだものです。それからいまの無味無臭の殺菌剤も、子白鳥星から提供されたものでした」

すでに子白鳥星の人と接触があつたのだ。視察団員たちは、目的地に着いたという実感を持つたのだ。別の乗組員が説明に立つた。

「皆さんが無事検査に合格されたら、いよいよ第一回目の外出となります。最初はわれわれ乗組員も含めて全員が降りて、宇宙港内の会場で歓迎式があり

ます。会場へは迎えの乗り物が来ることになっています。バスと言っていていいのかわかりませんが、ちよつと変わった乗り物です。

それと、下船したら、船内よりも少しだけ重力が小さいので少しからだが軽く感じられると思います。が、すぐに慣れます。

それよりもこの星の重力は地球よりも二、三割小さいので、慣れた後もジャンプしたりすると思つた

より高く上がって、天井などに頭をぶつけることがあるかもしれないので気をつけてください。しかも地球よりも住居等の天井は低いそうですので。

これから四箇月の視察期間、皆さんはすべて日本語で大丈夫です。お一人に一人通訳が付いてくれます。また子白鳥星人が話す声は、私たちには聞き取りにくいです。かすれたような小さな声でしゃべるからです。

それから、私たちはこの星の生活習慣をほとんど知りません。船内のパンフレットは、これまでのわかつたことを書いたものです。しかし実際に我々は、この星の人の生活をほとんど知らないといえます。仮にパンフレットを勉強された方も、あまり参考にしないと考える方が間違いないと思います。つまりわれわれは彼らについて何も知らないのです。逆に彼らは言葉だけでなく、地球や地球人のこ

とを非常によく知っています。地球人というだけでなく、われわれ日本人のこともよく理解していると思います。だから、皆さんは日本にいるときと同じように振舞ってかまいません。必要なことはすべてマンツーマンの通訳が説明してくれるはずですよ。

それから、すぐにお気付きになるとは思いますが、ここの人たちはみな同じような顔をしているので、われわれにとっては個体の識別が困難です。ただ耳

が非常によく動き、その動き方に個人差があるらしいので、人を見分けるときの参考にしてください。後は皆さんが、直接体験していろいろ感じ取ってください。

それからまだあります。大事なことですが、ここでは写真の撮影は一切禁止されていますので、絶対に隠し撮りなどもなさらないようにしてください。何故だかはわかりませんが、彼らが言うには、写真

は彼らの意思伝達手段に影響があるらしいのです。

これらの約束事を守らないと、視察は中止になる場合もあるそうです」

耳の話聞いたみんなのなかから、兎みたいな人たちだなどとささやく声が聞こえた。

最後に視察団長の国会議員ミスターYが前に出て話し始めた。

「みなさん、いよいよですね。あと十八時間しつか

り休養をとって体調を整えて、待望の視察を始めましょう」

これだけの短い挨拶で締めくくった。その前の乗組員たちの話が長かったので、視察団長の短い挨拶は好感を持たれた。

ここで解散となり、めいめい自由行動に移った。百三十才の男性人類学者ミスターZが十八才の体操

選手ミズBに近づいて、顔をひつつけるようにして何事か話しかけている。彼女もニコニコしている。見るとミスターZの手が彼女の尻の辺りを触っている。ミスターZの前が膨れているのがわかる。彼女はそつと彼の手を退けたが、怒るようすもなく二人は親しそうに話しながら廊下の奥に消えていった。たいした老人である。それに気付いた男性の中には、思わずわが身と比べて秘かに百三十才の人類学者を

羨んだ者もいた。

夫婦で乗船の三十六才の会社員ミスターSは、この九十日間一度も妻と交わっていない。妻の方からは何度か誘いがあつたが、会社員はどうもその気にならなかつたのを思い出した。

やはりあの人類学者の行動に気付いていた二十二才の男子千五百メートルの記録保持者水泳選手ミスターOも、この九十日の間女性との接触はもちろん

オナニーもしていないし、夢精もなかったことを思い出した。

どうも男性は宇宙空間では性欲がなくなるのかもしれない。子白鳥星での四箇月はどんな具合であるか。それにしてもあの人類学者の絶倫ぶりはすごい。やはり移植したものは相当高性能なのだろう。

会社員ミスターSは気になって、やはり夫婦で乗船している四十二才の内科医ミスターWにこっそり

聞いてみた。するとミスターWもこの期間一度も交渉がなかったという。

「そういえば、女房は多少不満そうだったような気もしますね」

ということなので、会社員は自分の場合と同じだと思つた。彼は船室に戻ると、特にもよおしたわけではなかったが、意図的に妻を誘つてみた。妻は、こんな時間と言いながらも喜んで応じた。一応こと

は成立したので、会社員は安心した。

各自の記録メディアに今後のスケジュールが配信されてきた。当面この先一箇月の予定であつた。最初の一箇月間はすべて日帰りの行動である。

最初に宇宙港内のホールで歓迎会があつたあとは、個々人が通訳の子白鳥星人と行動を共にすることになる。

画家は美術館やこの星の美術家を訪問したりする。

音楽家は音楽家同士の交流のほか、演奏会を聞いた
り、自らが演奏会で演奏したりする予定になっ
てい
る。医者は病院や治療の現場視察、環境の専門家は
環境問題の専門機関の訪問、政治家はこの星の議会
視察という風に、地球上でのさまざまな視察とほぼ
同じ内容が組まれている。

一万年も進んでいるというこの星に来て、地球上
でそれぞれが経験しているのと同じような視察内容

が組まれるというのはどうも理解しにくい。これはおそらくわれわれ地球人が理解しやすいように配慮されているのかもしれない。

いずれにしても視察団のメンバーは、これから見に行く未知の世界に対して大きな期待と、同時にある種の不安の時間を過ごしていた。

上陸

全員の殺菌完了が確認され、予定通り十八時間後の上陸が始まることになった。視察団員と乗組員全員六十六人が宇宙船のホールに集まった。

地球時間二千五百四十五年十一月三日十九時である。しかしここ子白鳥星ではどのように日にちや時間区切っているのだろうか。これからみんなが向

かう歓迎式の中で何らかの説明があるかもしれない。

頭に何らかの受信装置を付けた乗組員が壁の操作盤のボタンを押すとヒナギクのドアがゆつくりと開き始めた。冷気が船内に流れ込んできた。外の気温の方が低いようだ。ドアの外にはレンガ色の地面が広がっている。そのドアのすぐ近くに、ボールを伏せたような乗り物だろうか、バスくらいの大きさのものが止まっている。だが人のような姿はまったく

見えない。受信装置を付けた乗組員の合図でみんなはその乗り物の方に向かって歩き出した。乗り物にはドアらしいものも窓のようなものも無く、ただボールを伏せたような銀色の半球型である。しかしみんなが近づくくと、何も無いように見えていた一部がスルスルと上に開いた。内部は明るく輝いているが中の詳しい様子は眩しくてわからない。

明るいボール型の内部に入ったみんなは全員例外

なく内部を見渡して驚きの声を上げた。外からは窓も何もないように見えていたのに、中からは床下以外すべてが透明ガラスのように外が丸見えなのである。いま降りてきたばかりのわが宇宙船ヒナギクの雄姿が見える。

ヒナギクは、たしか乗るときには銀色に輝いていて、ヒナギクの花の絵が美しかったはずだが、いまは黒っぽくなっている。

ボール型乗り物の内部には椅子も何も無く、みんなはその場に立ったままだった。

突然正面奥にあるドアが音もなく開いた。ドアの向こうは大きなホールのようだ。ホール内にはたくさんの人らしいものが動き回っている。子白鳥星んだとわかってみんなは目を見張った。三頭身くらいの頭でっかちで、誰もが同じ銀色のタイトのようなもので身を包んでいる。

地球人たちはホールの真ん中により固まっていた。突然、場内にアナウンスが流れた。それは日本語だった。非常にながさな音量である。

「地球星日本国視察団の皆さんようこそ、皆さんが「子白鳥星」と呼んでいる星においでくださいました。われわれ全員、皆さんを大歓迎いたします。これから歓迎の会を行いますので、みなさん前の方にお進みください」

流暢な日本語で、発音も完璧である。お進みくださいと言われた方を見ると、たくさんの子白鳥星人が集まっている。みんなはそちらに向かつて歩いた。三十メートルほども歩いただろうか、何となく体が軽い。宇宙船内よりもやや重力が小さめだと説明があったとおりのだ。

子白鳥星人たちが近くに見えてくると、彼らは思ったより小さい。頭は異常に大きい、身長は人間

の小学五、六年生くらいだろうか。大人か子供か、男か女かの区別がつかない。みな同じに見える。銀色のタイツに見えたものは、大きな頭を支える太い首のところできつくりセーターのようになってい顔と頭は出しているのだ。首まですっぽり覆っている。タイツのようなものは、遠くから見たとおりに銀色だが、剥き出しの頭と顔の色も、何となくそれに近いが艶が無く、やや土色がかった銀色というのだろ

うか。大きな真ん丸い目が二つ、鼻の穴らしい小さな穴が二つ、口と思われる大きめの穴がひとつ。ただし人間の唇に当たるものは無い。顔の横には人間と同じような位置に耳がある。これは非常に大きく、まさに兎の耳に似ている。頭髪に当たるものはない。

船内でのレクチャーであつたように、この耳の動きに個性があるらしい。そういえば、立っている彼らの耳は、兎の耳のように常に動いている。

よく見ると目玉がひとつの者もいる。その彼が振り返った。他の者と同じ顔のつくりだ。彼らには後ろにも目があるのだ。耳が自由に動き、後ろにも目玉が一つある彼らは、周囲の情報収集は完璧なのだろう。

われわれが近づいて立ち止まると、子白鳥星人たちから拍手が沸き起こった。といつても鈍い小さな音の拍手だ。でも拍手には違いない。一人が自ら拍

手をしながら中央に進み出た。

「みなさん、ようこそ遙かなる地球星からおいでくださいました。これから、皆さんの星では百二十日という計算だと思えますが、ここでは百五十日ほどになります期間、心行くまで私たちの世界をご堪能ください」

完全な日本語だが、やけに声が小さい。たしかに口らしいところを動かしているが、その動きはほん

の少しだ。もつと大きく口を開いて話してもらいたいと、地球から来た者たちはみな思った。しかし、一応言っていることはわかった。今度は視察団長の国会議員ミスターYが前に進み出て、歓迎に答えるスピーチの番だ。

「子白鳥星の皆さん・・・」

視察団長が、選挙演説のような調子で話し出したとき、子白鳥星人の中には手で耳を覆うものがいた。

他のものも耳に蓋をするように顔の横にぴたりと引っ付けている。

そのとき、まだ頭に受信機を付けたままの乗組員が、視察団長のところに駆け寄って、何事か耳打ちした。視察団長はわかったというように頷いてから演説の続きを始めた。

「失礼しました」

今度は狭い部屋の中で静かに話すような調子だ。乗

組員に小さな声で話すように耳打ちされたようだ。

「暖かい歓迎、本当にありがとうございます。このたびは二十六名の視察団を結成して、訪問させていだきました。この二十六名はいろいろな分野の専門家で構成されています。これから皆様方の進んだ暮らしぶりを勉強させていただきたいと思えます。

どうぞご指導をよろしくお願いいたします」
挨拶がすむと、子白鳥星の一人が前に出た。

「では、これから皆様お一人ひとりをお世話するものとの対面を行ないますので、視察団の皆さんは年齢のお若い順に女性十三人、その後男性十三人の順に一列にお並びください」

乗組員たちは一歩下がり、その前に視察団員二十六人が指示されたように一列に並んだ。

その一人ひとりの前に、子白鳥星人たちの中から出てきた者が、向かい合って並んだ。そして両者は

野球の試合開始でホームベースを挟んで並んだ対戦チーム同士ののように、一礼した。

そういえば、地球を出てくるとき日本では第六百二十七回夏の甲子園大会の最中だったことを思い出す者も少なくなかった。

それから宇宙星人はそれぞれ担当する相手と手を繋いだ。手袋をしている人と握手したような感触だ。みると彼らが着ているタイトスのようなものは、指の

先まで覆っている。彼らはおよそ人間の顔とは似ても似つかない姿であるが、なんとなく笑顔で相對しているらしいことはわかる。しばらくするとつないだ手から冷たさが伝わってくる。小学生の女の子ミズAはパートナーとなった子白鳥星人に、

「手が暖かいですね」

と言われて、

「あなたは冷たいのね」

と笑顔で答えた。

「そんなに暖かい手をしていて、暑くないの？」

「いえ、いまは少し寒いくらいです」

ミズAと、パートナーは、普段学校で友達と話すように会話している。しかし、その他の大人たちは、まだ得体の知れない冷たいものに手を握られているような感じで落ち着かず、誰も口を利かない。

乗組員もだが、視察団員たちは若干の情報は得て

いたものの子白鳥星人の姿を見るのは初めてであるため、何となくある種の怖さを感じていた。これまでに写真さえ見たことが無かったからである。

子白鳥星人の司会者が、

「では、これからしばらくの間、新しいパートナーと交流する時間にします。みなさんそれぞれ後ろのテーブルのところに行つて、お話しをしてください。乗組員の方はこちらに集まってください。滞在中の

ことについて説明いたします」

見ると、いつの間にかはじめここに入つて来たときみんなが立っていた位置に、たくさんの小さな丸テーブルとその両側に椅子が二つずつ置いてある。視察団員たちは、それぞれのパートナーに手を曳かれるようにしてテーブルに向かった。

テーブルも椅子も、小学校のそれのように低い。視察団の大人たちにとっては、やや窮屈であつた。

さつそく各テーブルで自己紹介から会話が始まった。各テーブルの間隔はそれほど離れていないのに、二十六組もの会話が始まったわりには非常に静かである。どのテーブルも会話の声が非常に小さい。子白鳥星人たちはすべて日本語で話した。それぞれ自分の名前を紹介したが、それは少なくとも日本語で発音すると、アクロンf、マーラーf、サティmなどというものであった。これは地球に実在する名前

から適当に選んだものなのだそうだ。名前の後の f と m はそれぞれ女性か男性かを表している。

二十八才の女流画家ミズ E のパートナーはエネスコ f であった。彼女は写真が写せないことが気になつていたので、早速訊いた。

エネスコ f は、この星では、写真は必要ないからであると説明した。彼らが目から得た情報は、その

ままた他の人に伝達でき、伝達された人は自分のイメージの中で、伝達した人とまったく同じイメージ情報で自分の中で再現できるからである。それはデジタル資料として遠隔地の人からも伝達可能だし、過去の人の脳内データは、その人の日本でいうハードディスクに当たるようなものにすべて保存されているので、直接その記録にアクセスすれば、その人が生前に得たすべてのデータを確認することができる

のである。

この星にも太古の時代には写真のようなものはあつたようだが、そのようなものはすでに一万年以上昔に無くなつたということである。昔あつた写真と、いうものは、聞いた所では現在の情報に比べると、比較にならないくらい情報量は少なく、しかも不正確なあいまいなものだとも言つた。エネスコフ自身もそのようなものを見たことが無いという。それだ

けでなく、エネスコフも詳しくは説明できないと言っていたが、地球人たちが持ってきた写真機は、子白鳥星人たちの交信の妨害になる可能性があるので使わないで欲しいというのだった。

画家のミズEは、この星に絵はあるのか訊いた。エネスコフは地球の絵に相当するものはあるが、それらについてこれから視察の中でたっぷりと見てもらうので楽しみにしてほしいと言った。

百三十才にして精力絶倫の人類学者ミスターZの
パートナーはザンドナイフという名前だった。

「ところで君は男なのかね、女なのかね」
いかにも彼らしい質問である。

「私は女です。まだ皆さんお気付きで無いかもしれ
ませんが、今回皆さんの通訳とご案内などのお世話
をする者は、男女を問わず全員まったく同じ能力を
備えています。そこで誰がどなたの担当になるのか

を決めるとき、男の方には男が、女の方には女がな
った方がいいとか、その逆がいいとかいろいろな意
見がありました。結局名前前の頭文字が皆さんの視
察団員記号と見合おうようにしようということになっ
たのですよ。だから私は、あなたの記号Zに対応す
るようにZの頭文字のザンドナイfといえます。実
は今回のパートナー選考は大変な応募者の中から選
ばれたのですが、その二十六人に皆さんのAからZ

までの二十六種類の頭文字に相当するパートナー名をつけたのです。私の本当の名前はアチツカナルビーといひますのよ」

「アチツカナルビー？それをあなたの国の発音で言うとしたらどんな風なのですか？」

「アエチュイーカエニヤエツルブイー」

「??????」

声が小さい上にこの複雑な発音はすぐには理解で

きなかつた。それより人類学者に関心があつたのは別のことであつた。

「じゃあ、本当の名前はいいよ。ザンドナイさんでいきましよう。ところでザンドナイさんは女と言われたが、女か男かはどこでわかるの？見たところここにいるパートナーの皆さん、だれも同じに見えるのだけど」

「そうですか？一人ひとり随分違ふと思えますけど。

皆さんは、個性がある私たちの耳の動き方で区別するのようにレクチャーを受けてこられたと聞いていますけど、それはかえって難しいかもしれませんね。

Zさんも、今すぐはわからなくても、それぞれの顔や表情の違いを注意するようにしたらいいですよ」

そう言つて、ザンドナイ f はすぐ近くで対面している二つのテーブルのパートナーを例にとつて説明した。説明によると隣のテーブルで環境研究家ミズ

Jの相手をしているのはジョリヴェmという名前で男なのだそうだ。ザンドナイfによると彼は非常に凛々しい顔つきをしており、子白鳥星では女性が憧れる顔なのだそうだ。その隣のテーブルで歯科医ミズLのパートナーはラフfで女。ジョリヴェmとはまったく対照的でふっくらとした優しい顔なのだそうだ。彼女もこの星では相当な美人だということである。そう言われてみると、何となくわかるような

気がしなくもないが、それにしてもこうして説明されないと、まだ自分では区別できそうにもないとミスターZは思った。

「ところで、男と女はどこで区別するのかね？」

「それは顔つきを見ただけでたいいはわかります。でも座っているときはわかりませんが、立っている人を見れば一目瞭然です。ほらあすこを歩いているのは男ですが、股のところ少し飛び出しているで

しよ。女にはそれが無いのです」

そう言つてザンドナイフは立つて見せた。たしかにザンドナイフの股間に出っ張りは無い。出っ張りといつても僅かなものなのだが、みな体にぴつたり
のタイツを着ているので注意さえすればわかる。

三頭身ともいえるような大きな頭、三つの目、兎のようによく動く耳といったこと以外では、頭と胴体と二本の手を持ち、二本足で歩行すること、それ

に男女を区別する股間の突起の有無などは地球人と共通である。

背丈が平均的な地球人、それも日本人の肩までくらいしかないことも特徴と言えるが、これは地球上でもピグミー族のように小柄な種族もいるから大きな違いとはいえない。

ミスターZは人類学者らしく、早くも子白鳥星人を把握しようとし始めていた。ミスターZは男性で

ある自分のパートナーが女性であることが気になった。いま聞いたところでは環境学者ミズJのパートナーはジョリヴェムという美男子らしい。Zらしい質問をした。

「スケジュールによると、これからしばらくの間われわれは毎日宇宙船に戻ることになっているが、その後宇宙船以外で寝泊りするときには、どのような形になるのかな？」

「いろいろな場合があります。お国のホテルに当たる施設に泊まる場合もあるし、一般の家庭にホームステイすることもあります。どんなときも私はひと時もあなたのそばを離れませんからご心配は要りません」

「寝るときもですか？それにトイレや風呂に入るときは？」

「ええ、すべて一緒にいますよ」

「ええ？、恥ずかしいじゃないですか。それにトイレは臭いし。セックスの問題もあるし」

「地球の皆さんと私たちがセックスすることはあり得ません。種の観点からも交配は不可能です。それに失礼ですが、私たちが地球の皆さんに恋をすると
いうことは無いと思います」

ミスターZは、こっちこそそんなことはありえないと言いたかった。

体操選手のみズBはバツハmというパートナーが担当であつた。ミスターZのパートナーザンドナイfの説明を当てはめて観察すると、バツハmはまさしく男性である。

「資料によるとあなたは体操選手ということになっていますが、地球では皆さんそういうことをされているのですか？」

このテーブルではパートナーから質問が出た。た

しかに子白鳥星人の体形から見た限りでは、地球でいう体操に向いているようには思えない。ミズBは説明した。

「私は競技者として、必ずしも一般的とはいえない内容の体操を行っていますが、ごく平易な体操は、子供から大人、老人まで誰もが日常的に親しんでいきます。それらは主に健康維持と楽しみのためです。それに比べると遥かに難度の高い内容を究めて、そ

の精度を競っている私たち競技者は、一般の人たちからはむしろ見て楽しむものになつていきます」

「私たちは、健康維持は脳内にある健康管理プログラムによつて常に最善の状態が維持されているので、体操のようなもので維持するという考え方はありません。しかし体を一般の人が出来ないような動かしか方をして、見る人を楽しませるシヨウはあります。これはあなたがおっしやる競技としての体操に当た

るものかもしれませんが、いずれ見学していただくことになるでしょう」

ミズBは、そのような場で、自分も何かを演じて見たいと、楽しみに思うのだった。

バイオリニストのミズFは、人類の偉大な創造物である音楽と、ヴァイオリンの音色を早く子白鳥星人たちに聞かせたくてうずうずしていた。パートナ

ーのフォーレmに、

「音楽会はたくさんあるのですか？」

といきなり訊いて、

「音楽会とはどんなものですか」

と逆に訊かれた。

「地球の音楽会について、レクチャーを受けていないのですか？」

「受けました。ある作曲家が作った音楽を、演奏家

が演奏するのを千人もの人たちが黙って、二地球時間くらいも聞くというのがどんなものなのか、人々がどうしてそんなに長い時間黙って、他人の音楽を聞いていられるのかも理解できません」

「地球では、それはとても贅沢で貴重な時間で、人々は高いお金を払い、忙しい時間をわざわざ割いて聞きに行くのです。そしてそこで演奏された音楽は、そうした人々の期待に十分に応えるものなのです。」

「ここではそのような催しはないのですか？」

「あることはあります。こんど一緒に見ていただきませんが、どうも随分様子が違っているように思います。二時間なんてとんでもありません。長くても地球時間でいうと十五分、五分くらいのこともありません」

ミズFは、どうもそれが音楽会に相当するものなのか、はなはだ疑問であつた。自分の演奏で子白鳥

星の人々をうつとりさせようという期待はやや萎んでいった。

このようなやり取りがどのテーブルでも行われたが、視察団員たちは大なり小なり子白鳥星人の暮らしと地球の暮らしの大きな違いに早くも気づき始めていた。地球と似た環境の中で、地球人に似ていない生物がいるとはいえ、七千五百光年離れた

星での生活が違ふのは当たり前で、これまで視察団員たちが得た情報によれば、これでも類似点がたくさんあるといえるのかも知れない。

またみなが受けた印象では、地球より一万年進んでいると自負していると聞いてきたが、そのことをひけらかすような言動は一切なかつた。

こうして地球星人と子白鳥星人の交流第一日は終わった。

視察団員たちは、当面の我が家である宇宙船ヒナギク号に戻つて、ほつとしたのであつた。夕食の間には、初対面での印象を語り合つた。相変わらず百三十才の絶倫人類学者ミスターZが怪気炎をあげていた。

「わしのお相手は、ザンドナイという名の妙齡の女性だったが、誰があんな色気も何もない頭でっかちに惚れるものかね。男と女の違いも、タイトの股間

を見なきやわからないんだから、味気ないものだよ」
「世界が違えば、それなりの人生の機微があるのじやないですか」

と言ったのは、三十才の主婦ミズHだった。彼女のパートナーはハルヴォルセンfという女性で、二人は人生の楽しみについて話が弾んだというのであった。

視察はじまる

その翌日から視察が始まった。初めの約一箇月は
いわゆる日帰りの行動である。視察団員たちが宇宙
船を降りていくと、二十六台の半円形のボールを伏
せた小型の乗り物が来ていた。

それぞれのボールのそばには昨日顔合わせしたパ
ートナーが立っていたが、それだけではどれが自分

のパートナーか皆目わからない。ただ小学生のミズAとミスターNだけはいち早く自分のパートナーを見つけて、走り寄っていった。その小学生が乗り込んだ二台はさつさと何処かに走り去っていった。それ以外の視察団員のところには、パートナーの方から寄ってきてくれて、昨日のように手を曳いてそれぞれの乗り物に連れて行ってもらった。

しかし日を追って、自分のパートナーを見分けら

れる視察団員の数は増えていった。パートナーたちは決して離れたところから大声で呼ぶようなことはしない。相手を見つけると、両手を前に揃えて左右に振りながら、小さな歩幅ながら素早い足運びで、スーと近づいてくる。そのかつこうが少し滑稽に見えるので、視察団員たちは内心笑いをこらえながら、自分の方にパートナーが近づいてくるのを待つのだった。

バイオリニストのミズFは、視察三日目にパートナーのフォーレmに案内されて、パートナーが地球の音楽会に相当するのではないかという催しを見学した。

音楽会場にしては狭い二十畳ほどの広さのホールには、椅子も舞台もなく、聴衆と思われる十人くらいの子白鳥星人たちが思い思いに立ったり床に座つたりしている。寝そべっている者もいる。

やがて会場が薄暗くなると、聴衆はみな立ち上がった。すると何処からともなく信号音のような音が、高低の差をもつて聞こえてきた。それは非常に小さな音であつた。よく聞くと四つの音が延々と繰り返されている。ドイツ語の音名で B A C H の四つの音が繰り返されているのだ。ミズ F はおよそ八百年前に活躍し、その後音楽の父とまで言われて音楽家たちの尊敬を一身に集めた大作曲家バッハの綴りを音

名にしたものであることに気付いた。単なる偶然なのか、何か意図があつてのことなのか不思議であつた。

やがて聴衆はその音に合わせて体を緩やかに動かしだした。よく聞くと非常に小さい声だが、何か歌うように声を出している。それはB A C Hの四つの音をなぞっているようでもないし、それから生み出された別のメロディを歌っているようでもない。そ

れが五分くらい続くと歌や体の動きをやめる者がだんだん増えて、誰も歌わなくなつた。そして流れていた音も止んだ。パートナーのフォーレムがあつけに取られているミズFの肩を叩いた。

「いまのは、地球から来られたあなたを歓迎するための歌と踊りでした。今度はあなたが何か歌ってください」

ミズFは、自分はバイオリニストだから、ヴァイ

オリンでお答えしますと言つて、ケースからヴァイオリンを取り出した。聴衆はその様子を珍しそうに見ていたが、この世にも美しい色と形の楽器を見ても、特に感嘆の声を上げるといったこともなかった。ミズFは小さな音で調弦すると、先ほど鳴つた四つの最初の音Bを朗々とした美音で弾き始めた。その瞬間パートナーのフォーレmが慌てて演奏を制した。ミズFはこのとき、視察団長の国会議員が演説を

始めたときのことを思い出した。見ると、ここにも耳を押さえずくまっている者がいる。ミズFは、わかったというように頷いてから、今度は世にも美しいピアノシモでBACHの四つの音を弾き、それにかけて即興でその四つの音に基づく変奏を弾いた。その音は、先の何処からか聞こえてきたのとは比べ物にならないほど素晴らしい音色であつた。ただミズFは、最後までピアノシモを守つた。演奏

は三分ほどで終わった。ミズFは最後まで黙って聞いていた聴衆に、自分の演奏に合わせて歌ったり体を動かしていいと、パートナーを通じて伝えると、もう一度B A C Hを弾き始めた。今度は、先ほどの信号音のように、この四つの音だけを繰り返した。聴衆はさつきと同じように声を出しながら蠢いた。五分くらいすると聴衆の声も動きも静まっていったので、ミズFも演奏をやめた。拍手も何もない、全

部で十五分くらいの催しだった。

このときミズFには何と言ったらいいかわからな
い、聴衆と交流したような感覚が残った。ミズFは、
みんながヴァイオリンの音色をどう思ったのかを知
りたかった。そこでミズFは、パートナーのフォー
レムに、一度自分のコンサートを企画してくれない
かと頼んだ。すると、

「あなたのコンサートならいきましたではないです

か」

と言う。ミズFは、自分の思いをどう説明したらいいのかわからなくなつた。彼女としては、あのよう
な、まるでかつてアメリカに連れてこられた黒人奴
隸たちの隠れた教会、ハツシユ・ハーバーでの連帯の
歌みたいなものではなく、芸術としての音楽を鑑賞
する会を開いてもらいたかつたのである。ミズFは
いろいろな説明を試みて、フォーレmに理解しても

らおうと苦心した。結局理解できたのかどうかかわからないが、フォーレはミズFの言うとおりの形のものをやってみようと言ってくれた。

聴衆は十人程度ではなく、少なくとも二百人は集めてほしい。そのために、それだけの人数を収容できるホールが必要である。聴衆は椅子にかけて演奏者の演奏を聴く形がいいが、そのような習慣がなければ、床に座ったり寝そべったり、あるいは立った

ままでもいい。いずれにしても、演奏中は演奏を聞くことに集中してもらいたい。ミズFは、このような地球でのコンサートの形を整えるように求めたのだった。

これに対して、フォーレmは演奏時間は十五分より長くないこと、音量は先ほどミズFが出そうとした最初のようなものではなく、そのあとでBA CHを聴衆の歌と踊りとに合わせて弾いたくらいに

してほしいと注文があつた。とにかく二、三日のうち準備をするという約束が出来た。

三日後はすぐにやつて来た。十九時間の一日はやはり短かく感じる。

ミズFはフォーレmに伴われて、要望されたとおりに準備したという演奏会場に向かった。その間にも、くれぐれも音の大きさに気をつけてほしいと念を押された。

会場にはすでに二百人くらいの子白鳥星人が待っていた。やはり彼らは、こしかけではなく、床に直に腰を下ろしている。二百人が待っているというのに静かである。見ると、みなが無言で待っているようにでもない。顔を寄せ合ってあちこちで話をしていく。フォーレ m に案内されてミズ F が、ヴァイオリンを片手にみんなの前に現れると、微かなざわめくような話し声はやまって、ミズ F の方を注目した。

拍手などは無い。しかし、良く見るとみなが、腰のあたりで両手首をひらひらと揺らせている。フォーレmは両手を広げてみんなの動きを制すると、何事かを話した。室内で静かに話すくらいの声である。これで後ろの方まで聞こえているのだろうか。とミズFは思った。

やがてフォーレmはミズFの背中を押すようにして、頷いて見せた。ミズFは聴衆に向かつて一礼し

てから、ゆつくりと楽器を構えた。通常のコンサートであればたいは、大きな音とは言わないまでも少なくとも豊かな音色で曲を始めるのだが、ここでは音量についてくどいほど念を押されている。地球上では終始小さい音だけの音楽というものは、普通はない。それはいわゆるクラシック音楽全盛の数百年前から変わっていない。

ミズFは自ら求めて準備してもらったコンサート

で、何をどのように演奏するか迷った。そして二日間考え抜いたプログラムをいま始めようとしている。ミズFはバッハの『G線上のアリア』を一曲目に選んだ。それをピアノニッシモからピアノの範囲の音量変化で歌いきることにした。

この曲は八百年以上前に作られたもので、いまでは地球でもほとんど演奏されることがなくなっているが、ミズFはさらに一万年進んでいるという子白

鳥星人たちが、この音楽をどう受け止めるか試したかった。ミズFがピアノニツシシモで長い長いミの音を始めたとき、全員の耳が動いて演奏者の方に向いたのを感じた。文字通り聴衆の耳がそば立てられたのだ。ミズFは、ピアノニツシシモからピアノニツシモの間にも、ピアノニツシモからピアノの間にもそれぞれ数段階の音量差を設けるようにして、細心の注意を払って表現を試みた。

この曲には前半部分にも、後半部分にも繰り返しの記号が付けられているが、ミズFはその両方を省いたので、演奏は四分足らずで終わった。その瞬間、聴衆の手のひらが腰の辺りで激しく振られている。フォーレmがミズFに近づいてきて、

「素晴らしかったです。御覧なさい、みなさん最大級の満足を表しています。ありがとうございます、ではもう一曲お願いします」

と言つて、ミズFの肩に触れた。

ミズFは、短い曲をあと二曲弾きますと言つてから、楽器を構えた。こんどは一曲目と対照的に、広い音域で猛烈な速さで動き回る音楽だ。最近地球で人気の曲である。ただし、音量は常にピアノ以下にした。途中ゆっくりになって広い音域で音が上下する部分があつてから、すぐに最初の速い動きに戻り、二分弱で曲は終わった。

こんども手のひらの反応はあつたが、それはごく僅かだった。ミズFは、再び古い曲の中から、今では退屈だとして聞かれることの無いロマンスを弾いた。もちろん音量を抑えた中での表現にしたことはいうまでもない。これも七百年以上前の曲だ。それを、地球で演奏されるよりもかなりゆっくりと弾いた。これも大きな反応を得た。

ミズFの演奏が終わるとフォーレmが、お礼に私

たちの演奏も紹介しますと言つて、一人の子白鳥星人をみなの前に招きだした。彼は小さな豎琴のようなものを持っている。ミズFは、古代の壁画で見た豎琴とそっくりだと思つた。彼が豎琴を爪弾きながら、小さな声で歌いだした。豎琴の音は、共鳴版も何もない弦が震えるだけの小さな音だが、彼の歌声も喉の奥だけで歌っているように小さかつた。そして、ここでも聴衆が立ち上がつて、微かな声を出し

ながら、体を動かし始めた。先日と同じパターンである。ミズFは、彼らが自分の演奏に満足したらしかつたにもかかわらず、やはり彼らの音楽とはこの形であることを理解させられたのだつた。

芸術に関して、音楽よりも話が通じ合つたのは画家ミズEとパートナーのエネスコfであつた。二人はまず美術館に行つたのである。つまり美術館に相

当するものが存在したのである。この星の人たちも絵を鑑賞するという習慣を持っていたのだ。

そこは地球の美術館を容易に想像できるほど共通したものであった。そこには大勢の子白鳥星人たちが、地球の美術館の見物人と同じように、一人で、あるいは二人連れ立ってそぞろ歩いている。展示さ
れている絵は大きさが統一されていた。それはすべて縦横とも一メートルほどの正方形であった。

そして絵は、どれも霧がかかったような淡い風景のようなものである。風景ではないかもしれない。淡色のかすかな濃淡が揺らめくように画面に描かれている。このような絵は地球にも在りはするが、展示されている何十点という作品がほとんどすべて似ているのが、ミズEには異様に思えた。それぞれ作品の違いといえ、僅かずつ色合いが異なる点だけである。図柄も同じではないが、どれも構図とい

うものではなく、ただ僅かな濃淡があるだけなので、まるで壁紙を見ているような感じであつた。

パートナーのエネスコフの説明によると、展示されていている作品はいずれも子白鳥星の古今の大家の作品で、この美術館を訪れる人は後を絶たないのだそうだ。

ミズE自身、抽象画家で地球でもその発想の奇抜さは、誰も思いつかないようなもので、宇宙から来

た天才と称されるくらいだから、これらの絵そのものにはまったく驚かなかつた。驚くどころか色合いやグラデーションに非常に強い印象を受けた作品もあつた。特に地球上にはない色、まるで可視光線ではない色といえいいのか、赤外線や紫外線に含まれる波長のものではないかと思えるような不思議なトーンを感じるものが使われている作品には、非常に興味をそそられた。とはいつても、地球人である

ミズEには色として見ることは出来ない。

「この何ともいえない、重々しい雰囲気や強い刺激を感じる雰囲気は何処から来るのですか？」

ミズEはエネスコfに訊かずにはいられなかつた。

「この赤よりも暗い色や、眩しいような白っぽい紫のことですか？」

とエネスコfは、逆に訊き返してきた。エネスコfには色として見えているようだ。ミズEは、物理的

に理解し合えない世界があることを知ったのだった。
ミズEは自分の作品をエネスコfに見せたくなつて、宇宙船まで一緒に来てくれるように誘った。エネスコfは宇宙船ヒナギク号の入り口まで来たが、決して中に入ろうとしない。何故か訊くと、船内の室温に長く曝されていると体調を壊すのと、内部の環境音が強過ぎるから絶対に宇宙船内に入らないよう指導されているということだった。

ミズEは、船内の室温は確かに、ここの外気温よりも高めだが、環境音はこの種の乗り物としてはむしろ非常に静かだと思つていたので意外であつた。しかし、改めて注意すると、たしかに低い音が常に鳴っている。この重低音が、この静かなる人たちには堪えるのだろうか。

ミズEはエネスコfを宇宙船の外に待たせて、船内の自分の部屋に戻り、自作をファイルしてある大

容量メディアを持って出てきた。

宇宙船のすぐ外でエネスコフに自作を見せることにした。エネスコフはディスプレイの画面いっぱい
に次々と現れる、色とりどりのミズEの作品を黙つて観ていたが、途中で

「もういい」

と言つて観るのを止めた。ミズEが感想を訊くと、
「確かに素晴らしい作品なのだと思いますが、これ

以上見ていると頭がくらくらしめてしまいそうです。ひとつだけ初めの方で見たものに気に入ったのがありました」

と言う。ミズEは、それは灰色一色の濃霧の向こうに太陽が昇るところをイメージした、あまり抽象的ともいえない作品のことだと思つて、それをもう一度開いて見せた。

「そう、これです。胸に迫るような素晴らしい絵で

す」

なるほど、これは先ほど美術館で見た絵たちと共通点がある。彼らの絵の概念はこういったものに固定されているのかもしれない。ミズエは、そのあまりにも変化の無い感性に驚いた。良く言えば、ほんの微かな違いにも大きな違いを感じる鋭さをもっているともいえるのかもしれない。

子供たちはもつと率直に交流できた。小学生の二人、ミズAとミスターNは最初の数日間ともに行動した。ミズAのパートナー、アクロンfとミスターNのパートナー、ナウマンfが相談してそうしただった。

二人は、まず学校を訪問した。ここにも子供たちを集めた学校があるのだ。子供たちは大人をそのまま小さくしたような体形である。違うのは、動きが

活発で、終始チヨコチヨコと動き回っている。両手を体の前で振り子ののように左右に動かしながら走り回っている。

声は大人よりも一段と甲高く大きい。だから学校のホールで遊びまわっているところでは、大人たちの集まりよりもずっと騒がしい。それは地球の小学校と同じであった。

騒がしさの最中に、先生なのだろうか、大人が出

てきて遊びまわっている子供たちに号令をかけた。不思議なことに、その号令の声は小さいのに、子供たちには聞こえたようで、すぐに先生の周りに集まった。五十人くらいだろうか。先生は子供たちに何か説明している。すると今度はナウマンfが話し始めた。先生も、ナウマンfも狭い室内で二人だけで話しをしているくらい小さな声で子供たちに話しかけている。子供たちは、誰一人として先ほどのよ

うな甲高い声を出したりせずに話を聞いている。

ナウマン f は、ミズ A とミスター N を自分のそばに呼び寄せて話し始めた。二人の小学生を子供たち
に紹介しているようだ。そしてミズ A とミスター N
には日本語で言った、

「では、皆さんに自己紹介しましょう。あなたたちの言葉でかまいませんよ」

二人は顔を見合わせたが、ミスター N がお先にど

うぞと言うようにミズAを促したので、ミズAはにこりとして子供たちの方に向いて、しゃべりだした。

「皆さんこんにちは。私たちは遠い遠い地球という星から、九十日かけてやって来ました。子白鳥星の皆さんとお友達になりたいと思います。それからいろいろ皆さんのことを教えてください。私のことはミズAと呼んでください」

はきはきした大きな声だったが、子供たちは誰も

耳をふさいだりしていない。ミズAが話している最中に、アクロンfが同時通訳をした。アクロンfは、比較的大きな声で話しているミズAのすぐ隣で小さな声で通訳しているのに、子供たちには伝わっていないようだった。ミズAが話し終えてペコンとお辞儀をすると、子供たちは腰の辺りで手の平をひらひらと振った。今度はミスターNが自己紹介した。

「僕はミスターNと言います」

自分の名前を言うのにミズ、ミスターを付けていうのは、そのようにしようという視察団としての申し合わせによる。

「僕はこの星のことがいっぱい知りたいです。それからみなさんと一緒に遊びたいです。それから皆さんに僕たちが住んでいる地球のことを知ってもらいたいです。どうぞよろしく」

ミスターNも元気いっぱい挨拶した。二人の挨拶

撥がすむと、子供たちはあつという間に二人を取り
囲んでしまった。先生やパートナーたちは為すに任
せている。そして子供たちは二人の手を曳いてもう
遊びの仲間に取り込んでしまっているようだ。ただ
子供たちは日本語がわからないらしく、ときどきパ
ートナーのところを駈けてきて何事か聞いている。
パートナーの手を曳いて自分たちのところに連れて
行って、通訳させたりもした。とにかく子供たちは、

互いに言葉もわからないまま、もう楽しそうに遊びまわり始めたのだった。

そこで男の子ミスターNは、楽しみに持ってきたサッカーボールを取り出して、はじめミズAと簡単なパスをやって見せた。それからパートナーに説明してもらって子白鳥星の子供達に同じようにするよう誘った。子供達は嬉しそうに何人もミスターNの周りに集まってきた。ミスターNがその一人にパ

スを出すとその子はミズAがやって見せたようにボールを蹴り返した。ところがその瞬間足先を抱えてひっくり返り、痛そうに悶えている。みんながその子のところに飛んでいった。パートナーのナウマンfが、痛そうにしている足を見るために靴を脱がせた。タイツと同じように銀色の薄い生地で出来た靴だ。ボールを蹴ったその子の足から真っ赤な血が出ていて、足の指は脱臼したように折れ曲がっている。

集まった子供達はそれを見て、びっくりしたような声を出して、取り巻いていた輪が広がった。

ナウマン f は子供を抱えて、校舎の中に駆け込んで行った。ややあつてナウマン f だけが戻ってきた。彼女はみんなに何か言った後、ミスター N に向かつて、

「あの子は、直ぐに治療してもらうので大丈夫です。でもこの遊びは無理なようですね。他のことをして

遊びましょう」

と言った。

みんなは、鬼ごっこのような遊びをすることになった。

このようにして視察団員と子白鳥星人との交流が始まり、数日が過ぎた。視察団員たちは毎日宇宙船ヒナギク号に戻ってくる。

みんなは船内のホールで夕食をした。このとき五つの大きなテーブルに分かれて食事をしたが、どのテーブルでも話が途切れることはなかった。みんなにとってすべてが驚くような体験ばかりだったからである。

正式の報告は、各自レポートにまとめることになっているので、ここでは誰かが前に出て報告すると言ふことは無かったが、とにかくテーブルではそれ

ぞれが、その日体験してきたことを話さずにはおれなかつたのである。

このような賑やかな夕食会は、日帰り視察の一箇月間続いた。しかし泊りがけで出掛けるようになってからは、視察内容によつて宇宙船に戻つてくる日が異なるため、全員が一同に会することは無くなつた。それでもたまたま同じ日に戻つてきて宇宙船で食事をするメンバーはひとつのテーブルを囲んで、

それぞれの体験談に花を咲かせたのだった。

三十四才の精神科医ミスターRは、この穏やかな子白鳥星人の中にも、精神病患者がいることを知って驚いていた。それだけでなく、その数の多さにも驚いたと言う。彼はパートナーのラフmに案内されて、病院やカウンセリングの現場を視察した。そこには僅かとはいえ拘束服を着せられたものさえいた

のだ。驚くミスターRに、精神病院の院長はなぜこの星に精神病患者が多いかを説明した。もちろんラフmの通訳を通じたのだが、

「いまこの星では、人々は大変穏やかに行動し、静かに話します。しかし、昔はそうでなかったと聞いています」

昔と言うのは、一万年も前のことらしい。

「だんだん世の中が進歩するにしたがって、人々は

静かな気持ちで生活するようになりました。しかし本来人はそんなにおとなしいだけの存在ではないのです。いまの静かさは進歩が作り出したもので、人々にとつては自然なものではないのです。その証拠に、学校に行つて御覧なさい。子供たちは大声でしゃべったり笑つたりしながら遊んでいますよ。その子供たちが、大人になるまでに世の中の習慣を身につけてしまいます。しかしそれは一種の抑制でもあるの

です。だから抑制に耐えられない人も出てくるわけ
です」

院長がこんな話をしている最中に新しい患者と見
られる人が連れてこられた。拘束服などは着ていな
いが、病院の人に付き添われている。それを見て、
院長がミスターRに説明した。

「彼は、自分の言い分が通らないとすぐ大声を出す
症状がだんだん激しくなつたために、家族から入院

の申請があつたのです。ここには感情の起伏を激しい体の動きで表したり、奇抜な線や原色で絵を描きたがるような兆候が出た者は、早期発見して治療すると正常な精神状態を取り戻して社会生活に戻れるようになります。その意味でこの病院は、人々の平穏な生活を守る上で大きな役割を果たしているのです」

院長は、とくとくと話すのだつた。

二十九才の水泳選手ミスターOは、せつかく地球と同じように水と空気の有る星に来たのに、まだ一度も川も海もプールにもお目にかかっていない。パトナーのオルフは早くそういう所に行ってみていと要求するのだが、なかなか案内してもらえないでいた。

オルフは、もちろん水を知っていたが、それは飲料としての水で、それ以外に生活に関わる水とい

う概念を持っていないようなのだ。ミスターOは、宇宙船がこの星に着陸する直前に、直線で区切られたような海岸線を確認に見た。彼はそこに連れて行ってってくれるようにオルフfに頼んだ。

オルフfは海岸線に案内する前に、科学研究所のようなところにミスターOを伴って行った。そこの研究者らしい人に、オルフfは何事か質問している。質問に対する返答をミスターOに伝えた。

「海岸線のすぐ近くまでは近づけないようになって
います。それは海水が硫酸であるため危険だからで
す。どうしても見たかったら、展望台があるので、
そこから見るようにということですよ」

オルフは海岸が危険であることを知っていたが、
その成分を地球の言葉でどう言えいいのか知らな
かったので、ここに連れてきたらしい。ミスターO
は驚いたが、飲み水はどういう成分なのか逆に質問

した。研究者の説明によると、飲み水は普通の真水で、地球でいうH₂Oだという。そしてそれは無尽蔵に有る海水から作るのだそうだ。

ミスターOは、ここで聞くべきことかどうかとも思ったが、どこかに水泳ができるプールは無いか聞いてみた。そのとき地球人の訪問を珍しがって何人かの研究者が集まってきたが、水泳もプールも理解できないようであった。ミスターOは、苦心し

て水泳と、プールを説明して通訳してもらった。それでも研究者たちは理解できないように、互いに顔を見合わせている。

一人が言った。

「われわれの体の比重は約一・六です。もし水の中に入ったらたちまち沈んでしまいます。だからおっしやるような水泳というものはありません」

ミスターOは、なるほどと思った。人間もある程

度頭は重いが、三頭身ほどの子白鳥星人は水に入ったら、確かに頭から沈んでしまうだろう。しかし、逆にこれだけの頭の体積があれば、仰向けになつて頭の大部分を水につければ相当の浮力は得られるかもしれない。

彼はこの思い付きを、科学者たちに話してみた。科学者たちは何やらでんでに話していたが、一人が、「それは面白いかもしれませんが。実験してみる価値

はありますね」

というのである。実験できるかどうか相談してみるからしばらく時間をくれということになった。

一週間後、実験が行われることになった。科学研究所の屋外の広いスペースに仮設の十メートル四方くらいのプールが作られている。そこに満々と水が張られている。ミスターOは、思わずこれは真水かどうかを訊いてしまった。もちろん真水であるとい

うことだ。

プールの周りには、仮設の見物席まで作ってあつて、すでに大勢の見物客が座っている。説明によると、彼らは科学者、教育関係の人、政府関係の人、医学関係の人たちで、いわゆる一般公開ではないらしい。

ミスターOは水着になると、まず手を浸けて水温を確かめてみた。かなり冷たい。彼はいきなり飛び

込んだりしないので、十分に頭や胸に水をかけて慣らしてからゆつくりと水に入った。水深は一メートルくらいしかない。もう少し深くしてもらえばよかったと思った。

しかし、身長の小さい子白鳥星人が入るには手ごろかもしれない。

ミスターOはゆつくりと、泳ぎ始めた。見物席がざわついた。ミスターOは色々なスタイルで泳ぎ、

水中でくるりと宙返りをして見せたりもした。

さて、いよいよ子白鳥星人の番だ。この日のために選ばれた人が一人、手を体の前にそろえてしよんぼりと立っている。その姿が、ミスターOにはいかにも不安そうに見えた。

パートナーのオルフが、その選ばれた人を、オルテイスだと紹介してくれた。彼を安心させようとして、ミスターOは、笑顔の意味が通じるかどうか

疑問だったが、出来るだけ笑顔を作つて見せた。

ミスターOは自分が先に水に入つて、プールサイドに腰掛けさせたオルテイスを、抱きかかえるようにして水の中に入れた。小柄なのに重い。特に頭の側は非常に重いので、ミスターOは自らもバランスを失いそうになった。オルテイスの体は小さく震えている。やはり怖がつているようだ。ミスターOは笑顔を絶やささないようにしながら、オルテイスを仰

向けに水に浮かべようとした。オルテイスは頭が水につかると、何とかしてそれを水面より挙げようとする。ミスターOは、そうではなく逆に来るだけ頭を水中に入れるように、通訳してもらった。そして、オルテイスの体は自分が支えているから、まったく心配しなくていいとも伝えてもらった。

頭の大部分が水中に入ると、ミスターOの腕にかかる重みはかなり少なくなったが、オルテイスの体

は浮かばない。手足で水をかくようにさせたが、からだの割に小さめの手足では役に立たない。どうも泳ぐということは無理なようだ。ミスターOはオルテイスを水の中に立たせてみようとした。ミスターOが掴まえている間はいいが、手を離すとオルテイスはたちまち水の中に頭からひっくり返ってしまい、びっくりして大暴れした。ところが、その大暴れの効果で少しオルテイスの体が浮き上がった。オルテ

イス自身それがわかったと見えて、何回か自分で試すようになった。しかし、あまりにも激しく手足を動かす必要があったため、たちまちオルテイスは疲れきってしまった。

子白鳥星人初の水泳実験はこれで終わった。まったく不可能ではないが、彼らに水泳は向かないようだ。

人類学者ミスターZは、ザンドナイフと遠出して考古学博物館を見学した。そこには数万年前からの子白鳥星人の進化を表す展示があつた。それを見てミスターZは驚いた。数万年前には彼らも七頭身くらいなのである。それがその後の進化によつて少しずつ頭が大きくなつてきたのである。

七頭身の時代の女性には人間と同じように乳房もあるが、頭が大きくなるに従つて乳房はなくなつて

いる。また初めあつた頭髪は、これも進化とともになくなっているのだつた。

ザンドナイフは、このようにしてわれわれは進化してきたと誇らしげに言つた。

ミスターZにとって博物館はそれなりに興味のある場所だつたが、彼がザンドナイフと行動をともしだしてから常に頭にあつたのは、彼女と一度性交してみたいということであつた。彼がミズBを追ひ

かけたのとは違つて、ザンドナイフに惚れたわけではない。いかにミスターZでも一週間や二週間ザンドナイフと行動したくらいでは、彼女を地球の女性と同じように見ることは出来ない。ただ彼女の、体にぴったりとしたタイトの外からもわかる股間の様子を見るにつけ、一度試みてみたくなつたのであつた。

ミスターZは、あるときザンドナイフに、研究の

ために一度でいいからセックスしたいと耳打ちした。ザンドナイフは驚いたようすもなく平然とそれを聞いて、少し考えていたが、構わないと言った。

これにはむしろミスターZの方が驚いたくらいだった。さらに驚いたことに、ザンドナイフは、そのままミスターZを伴ってある小さな部屋に入った。そこも、何もない空間であつた。

ザンドナイフはさつさとタイツを脱ぎ始めた。や

や透明がかった白や赤や青が混じつたような肌には、はつきりと赤い血管が見えている。頭髪が無いのと同じように、股間には陰毛も無い。ただ性器の形は人間の女性とほぼ同じに見える。

ミスターZは、このような何の感情も伴わない行動に驚くばかりであつた。それでもザンドナイフの性器を見て多少の興奮を感じたミスターZは、服を脱ぎ捨てて膝まづくど勃起した性器を立ったままの

ザンドナイフの性器に挿入した。ミスターZは激しく腰を振って、たちまち射精した。人間ほどあからさまではないが、ザンドナイフも何かを感じたようにその間目をつぶっていた。

ミスターZは、タイツを着け終えたザンドナイフに年齢を訊いた。

「六十四才です。このようなことは何十年ぶりです。あなたとパートナーになれて楽しかったです」

何となくしんみりとした調子で言うのだった。百三十才のミスターZが驚くのも変だが、それでも六十四才と聞いたときは驚いた。

それとここに来て以来、子白鳥星人たちの年齢が見かけからではわからなかったが、初めて聞き知つたのであった。そしてザンドナイfは、今回の地球からの視察団のパートナーは全員六十四才だとも言つたのだった。それは何故かと言うミスターZの問

いに、すべてを経験しているものがふさわしいのではないかということと、そのように決まったと言うのが、
だつた。

翌日、ミスターZが昨日の接触で一段と親近感を増したという思いで迎えに来ているはずのザンドナイfに会うのを楽しみに、宇宙船から出て行くと、そこにはザンドナイfではない者が来ている。今度は男のようである。

「私は、ザードルmと言います。ザンドナイフは昨日死にました。私が新しいあなたのパートナーです」

「昨日元気に私を案内してくれたのに、どうして突然亡くなったのですか？まさか、昨日で六十五才になつたのですか？」

「いえ、今年のうちには六十五才になる者はいないはずです。死因はいま関係機関で調べているところで」

「わかりました。私からもご冥福をお祈りいたしま
す」

この日、ミスターZは新しいパートナーのザード
ルmと遠出のドライブをした。二人は窓も何もない
ように見える四角い建物が並ぶ街を抜け、広大な畑
が広がるところを走った。見渡す限り緑に実った野
菜のような畑は遥か地平線まで続いていて、その先
には異様に大きな葉っぱの茂った樹木の森が続いて

いる。

何処まで行っても山のようなものは見えない。ミスターZはザードルmに山というものを知っているかと訊いた。

「昔はこの星にも山があつて、というよりむしろ山ばかりだったと聞いています。人々は今よりもっと身軽だったので、山登りが盛んだったそうです。しかし今はこの星のある一箇所だけに山が連なる土地

が、記念として残されているだけで、他にはまったくありません。私も、その山がある土地を見たことはありません。ほとんどの者は行ったことが無いと思います」

「山ばかりだった昔と言うのは、いつごろのことですか？」

「およそ一万年前です。そのころから私たちは急速に進化を目指して、あらゆるものを改造し始めたの

です」

「進化は、自然に進んだのではないのですね」

「そうです、意図的、計画的に進められてきたのです。その一万年後の姿が今の私たちの世界です」

「その意図的な進化の計画は成功していると思われ
ますか？」

「成功していると思います。その最大の点は争いが
無いことです。数千年前までは常にどこかで戦争が

あり、時にはこの星全体を巻き込む大きな戦争もあったようです。いまでは戦争はもちろん個人的な争いも皆無です。ただ子供たちの世界では喧嘩はよく起こりますが、大人になるまでに争わないように教育されます。たまにそのようになれなかつた者は、病院で抑制を身につけるための治療がなされます」

ドライブをしながらこんな会話を交わして、ミスターZは宇宙船に戻った。

視察団員九人の死

翌日から、視察団員たちは突然視察の一時中止が言い渡され、宇宙船ヒナギク号に足止めされた。泊りがけで出掛けていた者たちも順次帰ってきて、同じように船内待機となった。理由は説明されなかつた。いずれにしても何らかのトラブルが発生したようだ。

ミスターZが視察団長のミスターYの部屋に呼ばれた。ミスターYは困ったことになったと言いながら、ミスターZに尋ねた。

「言いにくいのだが、あなたはザンドナイフを無理やり犯しましたか？」

ミスターZは、視察の中断がザンドナイフの死と関係していることを直感した。

「誰がそんなことを言ったのですか？」

と、訊き返したが、

「一昨日、あなたのパートナーのザンドナイフさんが突然亡くなりました。そのことは昨日新しいパートナーがあなたに同行したのでご存知ですね。ザンドナイフさんの死因は、当局で解剖した結果、地球人の精液が体内に入ったことだと判明したそうです。この星には色々な天体からの視察を受け入れていますが、他の天体の生物との交わりは厳しく禁じられ

ていて、もし禁を犯したら十九時間以内に死亡する
ように設定されているそうです。ザンドナイフさん
の死はそれであることが明らかになったのです。彼
女はその日一日あなたと行動をともにしたため、原
因はあなたにあることを通告してきたのです」
そこまで調査ができて以上、ミスターZは言
い逃れできないと観念した。

「たしかに私は彼女とセックスしました。言い出し

たのは私ですが、強要でもなんでもなく彼女も認め
た行為でした。そのとき、それで十九時間以内に死
ぬなどとは言っていないませんでした。知らなかったの
でしよるか」

「いや、大人は全員知っているはずだと言っていま
す。もしあなたの言うとおりでしたら、どうして
ザンドナイ f さんがあなたの要求に応じたのかわか
りません。一応そのことを当局に報告します。先方

は、場合によつては今回の視察そのものを取りやめにすると言つています」

視察団の足止めは続いた。原因については、あるパートナーが原因不明の死亡をしたので調査中だとだけ発表された。視察団員同士は、誰のパートナーが死亡したのかわからなかつたので、特定の視察団員に疑いを向けるようなことは起きなかつた。

結論は五日後に発表された。視察は予定期間続け

てよいが、ミスターZだけは残りの全期間視察を禁じるというものであつた。

船内では、ミスターZがパートナーに乱暴したからだと説明された。地球上では、それは強姦したことを意味する言葉だが、この場合誰一人そのようには受け取らず、何か暴力を振るつたのだと受け止めた。どう考えても相手がそのような欲望を起こさせるはずが無いとみんなが思い込んでいたからである。

宇宙船内軟禁となったミスターZは、ひとりこれまでの視察内容のレポートを作成し、さらにこのたびの衝撃的な経験を題材にした自伝を書き始めた。

この星の人たちは全員かならず六十五才で死ぬことになっている。どのようにならぬのかこれから調べたいと思っていたミスターZだったが、視察禁止で調べられなくなってしまった。

六十五才を目前にして、六十四才のザンドナイフ

が、死ぬとわかっていて、どうしても自分との性交を受け入れたのかは謎のままだったが、いろいろに想像することはできた。

ザンドナイフは、セックスがすんだ後『このようなことは何十年ぶりです。あなたとパートナーになれて楽しかったです』と言った。彼女は長い間未亡人だったのだろうか。それともこの星では性生活の年齢制限があるのだろうか。謎を含んだ出来事は、

ミスターZの創作意欲を大いに刺激した。しかし、数日後からミスターZは体調を崩した。食欲がなくなり、全身に紫色の斑点が広がり始めた。そのうち激しい頭痛に襲われ、ついに失神してしまった。船内の医師たちにも手の施しようがなく、ミスターZはまもなく死んだ。地球発進以来百二十日目、ヒナギク乗船者初めての死者であつた。

ところがまもなく、十八才の体操選手ミズBも同

様の症状に罹つたのである。船内の医師は歯科医、外科医、精神科医、内科医と総動員してもわからな
いので、子白鳥星人の医師が呼ばれた。診断は明瞭
であつた。それは子白鳥星人の間で恐れられている
一種の性病であつた。子白鳥星人の場合、感染した
だけでは、本人は発症しないが、感染者が性交する
とその相手は必ず発症するといわれているのだそう
だ。その二次感染者が一旦発症すると、全身に紫色

の斑点が広がって三日以内に死にいたるといふ恐ろしい病気である。

性交しない限り伝染することはないので、一旦その病気と診断されたものは、一切の性交が禁じられる。しかし感染しただけでは発症しないので、感染したことが本人にもわかりにくく、広がりが防ぎにくい厄介な病気である。

これはこの星で克服されていない三つの病気の一

つなのだそうだ。残りの二つとは、脳が突然溶けたようになる恐ろしい病気であり、もうひとつはある日突然激しい感情の爆発に襲われるという病気なのだそうだ。この最後の症状を示す患者をミスターRが病院の視察中に目撃している。

ミズBも一週間苦しんだ挙句、紫色になって死んでいった。百三十才のミスターZの死はともかくとしても、僅か十八才のミズBの死は船内に衝撃を与

えた。それも同じ性病であることがさらに視察員たちの恐怖を大きくした。

船内の恐怖を裏付けるように、それから十日の間にさらに七人が同じ病気で死亡した。二十五才の国会議員ミズC、二十八才のバイオリニストミズF、四十三才の歯科医ミズLとその夫で、四十二才の内科医ミスターW、二十五才の漁業家ミスターP、四十才の作曲家ミスターUそして四十五才の小説家ミ

スターXの七人である。

ミズLとミスターW夫婦がともに、この病気で死んだことは、フリーセックスとはいいながら、話題になりそうな状況であつたが、この緊急事態に、視察団員の間にはパニックに近い恐怖が広がり、他人のゴシップを話題にするような雰囲気ではなかつた。それに、医者が二人も同時に死んだことも、今後に対する不安材料となつた。

視察団は二週間ばかりの間に九人のメンバーを失ったことになる。しかもミスターZに端を発した病気は、どこまで広がるのか不安は消えない。

子白鳥星に着いてから、いつの間にか旺盛なフリ―セックス状態になっていたことが原因の、船内の惨状であった。

この性病の急速な広がりには、地球上で約千年前にアメリカ大陸を発見したコロンブスの乗組員が梅毒

をヨーロッパに持ち帰り、以後瞬く間に世界中に広がったという有名な説を思い出させた。

不幸中の幸いは、厳しい規律が守られている上に、視察団員とのそのような接触が禁じられていた乗組員には、一人も犠牲者が出なかつたことである。

犠牲者は九人でぴたりと止まつた。ミスターZに始まつた性交渉の芋づるのような関係は、そこまですだつたのだ。しかし、二十六名中九名を不名誉な病

気で失うという事態に、これ以上視察を続けるかどうかが議論された。

今回の視察の最大の眼目である、六十五才停年制についてはまだ十分な視察が行われていないという意見が大きな議論となった。

ここでいう停年とは、文字どおり六十五才で人生を終えるというものである。この星では全員が例外なくその制度に当てはめられているのである。

ほとんどの病気が克服されているため、先日のザンドナイフのように六十四才で死ぬ稀な例を除くと、みな六十五才まで生きてから命を閉じるのである。しかし、どのような形で命を閉じるのか、またそのことを人々はどう思っているのか、そしてその制度を実現させるメカニズムも、まだ視察で明らかになっていない。

議論はなかなか収束に向かわなかった。しかし、

この視察の最大の眼目を調べないまま地球に戻るというのは、ここまでの努力を無にするに等しいので視察は継続すべきとの意見が徐々に大きくなつていった。三日間にわたる議論の末、視察継続の結論が出された。継続する視察の期間も、当初計画された期間内となつた。

九人の遺体は防疫上の理由で、地球に持ち帰るべきではないという意見が大勢を占めて、この星で茶

毘に付すことが決められた。しかしこの点は、子白鳥星側の了解が必要であつた。

視察継続と死者の火葬について直ちに子白鳥星側に連絡され、どちらにも了解された。火葬については、この星でも死者は火葬することになつてゐるといふので、何の問題もなかつた。

九人の遺体は、この星の風習に従つて、特別の材質で作られた真っ白い布で包まれて、いわゆる火葬

場に運ばれた。火葬場には乗組員三十人と生存している視察団員十七人全員が参列して、この冒険的視察の途上で尊い命をなくした同僚を見送った。

火葬といつても、まったくあっさりしたものでもちろん読経などあるはずも無い。視察団員や乗組員の中に、読経できる者もいなかった。ただ、特別に時間を割いてもらつて、視察団長の国会議員ミスタ―Yが送別の言葉を述べた。それは簡潔だがメンバ

―全員の気持ちを言い表した言葉だった。ミスター
Yは非常に静かな声で語った。彼は、九名もの仲間
を失った悲しみと、視察団としての損失を悼み、残
ったものはこの悲しみを乗り越えて、視察の目的を
全うすると言った。また、未知の世界であることを
十分に認識して、常に節度ある行動に心がけること
を誓ったのだった。それは、あまりにも野放図にな
っていたフリーセックスへの戒めでもあつた。

火葬は事務的に行われ、骨拾いといったものもなかつた。というより、骨も残らない高熱での焼却であつた。

これらのことは、地球に連絡されたが、七千五百光年の距離は最速の手段を使つても片道九十日以上かかり、地球でこの情報を得るころには、宇宙船は帰途に就いている筈である。それでも全員の無事な帰還を待つ地球には知らせなければならぬことで

あつた。

視察の再開

再開された視察では、どの分野に於いてもこれらの地球運営にとって重要な課題が優先的になされた。

社会学者のミズKはパートナーのコダーイmとともに、六十五才制度の調査に全力を傾けた。彼らはまず、六十五才制度を実行している政府関係の部署を訪れた。

この制度はすでに七千年の歴史があるということだ。ただし初めのうちは八十才を上限として七十才からいつ人生を終えるのかを自分で選べる方式であった。だが、自分で選ぶ者はほとんどおらず、事実

上誰もが八十才まで生きることを選んでいた。そこで、自主選択幅は無くなり八十才に統一された。

その後数千年を経る間に、年齢は徐々に低くなり、約千年前に現在の六十五才になった。戦争、事故、病等による死亡がほぼゼロになり、生まれる数も制御できるようになって人口は常に一定に保たれることとなった。

現在では、生まれるとすぐ脳に埋め込まれるソフ

トに、六十五才の誕生日になると眠っているうちに生命を閉じるといふ命令が組み込まれるのだそうだ。

六十五才の誕生日を一箇月後に控えた者は、『快樂の家』という場所に入る。そこでは望みうるすべての欲望が満たされる。もちろん本能的な欲望もあれば、創造的欲望など文化的な欲望も満たされる。

例えば、地球人にたとえていうなら、絵が上手く描きたいと思ひながら努力してきたが、ついに有名

画家になることを果たしえなかつた者が、『快樂の家』では、自由自在に思う存分、観る者が感銘を受けるような絵が描けるのである。もちろん食欲や性欲も若いときと同じように旺盛に楽しむことができ。それはいわば六十五才まで生きてきたことへの褒美のようなものだ。担当者は説明した。その担当者自身六十三才だと言っていた。そして、

「私も二年後に『快樂の家』に行けるが、いまから

楽しみにしている」

と言うのだった。

ミズKは、ずっと疑問に思っていたことを、この「楽しみだ」と言った担当者に質問した。

「地球では、超高齢化が進んで、大きな社会問題になっていきます。しかし本人にとっては、死は家族や友達、知り合いと別れる辛いものです。別れだけでなく、本人としてもまだまだ生きて、いろいろなか

とをやり続けたいものです。この星の人たちはそうは思わないのですか？」

担当者は、即座に答えた。

「思いませぬね。六十五才というのは生きる長さとして十分です。十分すぎるくらいです。だから私のように、早く『快樂の家』に行きたくなるのです。これ以上生きていて何かあるというのです」

担当者の最後の言葉は、地球で生き続けている老

人たちが後半生の五十年、ある者にとっては百年にもなるような期間に何をすればいいのか、ほとんど
の老人が思うことであると、ミズKは思った。ただ
地球では、脳に埋め込まれた死亡命令は無いので、
天寿がある限り生き続けなくてはならないのである。
それにしてもミズKは、六十五才は若すぎると思っ
た。地球の時間に換算すると五十二才ということに
なるのだ。

精神科医のミスターRは、パートナーのラフムと街に出て、さまざまな家庭や大勢の人たちが集まっているところを訪ねて、六十五才制度についての意識調査を行った。

ミスターRは、この制度を生き物にとつては大変過酷な制度だと思っていた。彼は、千年以上昔のこととして聞き知っている『姨捨山』の話とダブらせていた。このような制度は人間としては許すことので

できない制度だと考えている。しかし、超高齢化について、やはり何とかしなければ、生ける屍のよ
うな人間が世の中に溢れていることも問題である。

ミスターRが意外だったのは、誰から話を聞いてもこの制度を問題視したり、六十五才で人生を終えることを否定的に考えたりしていないことであつた。若い者から、六十五才に近づいている者まで、ごく当たり前のように受け入れているのである。

本当はもつと長生きしたい、というような本音を聞きだせると思っていたミスターRは、この制度があまりにも長い歴史を持っているためか、あるいはこれに異を唱えると厳しい罰則があるのではないかと疑問を持ったほどであつた。

その疑問を、ミスターRはパートナーのラフムにぶつけてみたが彼も、自分は六十四才なので間もなくそのときが来るが、楽しみであると言う。そして

こう付け加えた。

「この世に、これ以上生き続けていて何かあるというのです。もう充分です。こんな退屈な生活は早く終わりにしたいくらいです」

ミスターRが地球で自分の周りで蠢いているたぐいさんの百何十才という老人たちから時々聞かされるのと同じ台詞だと思った。

しかし今の地球では六十五才やそこらではまだこ

のようなことを言う者はいない。

ミスターRは、この星は病気を克服し、地理的な条件はどんなことでも自分たちの都合が良いように造り変え、季節までも星全体を常春にしてしまつてゐる。個人的な争いや戦争は無くなり、社会の秩序は整然と守られているようだが、それと引き換えに何か大きなものを失つてゐると思つた。

地球では、病気は克服しているが、老化現象は克

服されていないために生ける屍のような人間が溢れかえっている。百四十五才の人気小説家ミズMや百三十才で精力絶倫であるだけでなく現役の人類学者として活躍していた故ミスターZのような存在はほんの少数である。

さらに地球では、いまだに局地的とはいえ戦争や民族紛争は絶えない。そのために多くの若者が死んでいる。

そうではあるが、一方で芸術や恋や仕事は人々を生きる意欲に駆り立てている。一万年進んでいると、いうのがこういうことなのなら、願い下げだとミスターRは思うのだった。

主婦のミズHはパートナーのハルヴオルセンfの案内で家庭生活を見て歩いた。ある家庭には三日間のホームステイもした。ホームステイ先では、彼ら

と同じ食べ物を食べた。視察団員たちは、この星の食べ物も食べられることが調査によつてわかつてはいたが、万が一の健康異常を避けるために、必ず宇宙船から持って出たものを食べることにしていた。しかしそれでは本当にこの星の生活を体験できないと考えて、ミズHは敢えて彼らと同じものを食べることにしたのだった。それはミズHと同じように別のところで家庭訪問をしていた夫の会社員ミスター

Sも同じようにした。

ミズHがホームステイした家庭で振舞われた食事は、どれも苦勞無く食べられるものだったが、すべてが薄味というより無味無臭と行ってよく、種類は幾つかあるのだがそれらは味覚的目的ではなく、栄養素として必要な種類が揃えられているようだった。そのためか、客を接待するために特別に料理に腕を振るったというような雰囲気はまったく感じられな

かった。

食卓を囲んでいる家族やパートナーのハルヴオルセン f からも、食べ物について美味しいとか、好きだとかいう、地球で食事に招かれた客とホストとの間のよくある会話は、一度も聞かれなかった。

説明によると、食卓に出たものはすべてどの家庭でも同じもので、無料で給食センターから配達されるものなのだそうだ。これさえ食べていけば、六十

五才まで病気をすることも無いし、体調を崩すことも無いという。また調理の必要も無いので、そのために時間をとられることも無いということを、この家の婦人は得意そうに話した。結局彼女は配膳をしなければなのであつた。

この家庭は夫婦二人だけで住んでいるようである。「子供さんは？」と訊くと、

「それはどういう意味ですか？」

と逆に訊き返された。

「地球では、男女が結婚すると普通子供が出来て、その子供が大人になるまで親子一緒に暮らすのです。最近は、子供は二人か三人というのが標準的です。たいていは自分たちの子供を可愛がり、大切に守って育てていくのです」

と説明すると、

「たまたま結婚した男と女の組み合わせで子供を作ってしまったって大丈夫なのですか？」

「どういう意味ですか？」

お互いに理解できないことばかりである。

「この星では、精子と卵子は受精センターに登録保存されて、優れた精子と卵子が選別されたうえで、最善の組み合わせによる受精が行われます。したがって優秀な子供しか作られないのです。子供は受精

施設の中である程度育つと、学校など子供専用の施設で教育されます。だからおっしやるような『自分たちの子供』という意味がわかりません」

「夫婦で一緒に生活されているようですが、それは子供を作って育てるためではないのですね」

「もちろんです。主な目的はセックスの楽しみのためです。それは別に夫婦でなくてもいつでも楽しめるのですが、やはり相性の良い相手を選びたいです

からね。でも時には違った相手ともセックスしたくなることもあるので、そんなときは友達の夫婦のところ遊びに行つて、互いに相手と楽しんだりするのです。しかし、そのような楽しみ方が許されていないのは結婚したものだけです。恐ろしい性病があるからです」

地球でも、フリーセックスは常識的になっているが、それはいわば公然の秘密であつて、『秘密』であ

ることには違いないのである。この星でのフリーセックスとは少し意味合いが違ふようである。ミズHは訊いてみた。

「そのようなセックスによつて子供が出来ないので
すか？」

「出来ません。セックスによつて精子は出ませんか
ら体内で受精することはありません。私たちの体は
そのようにセツトされているのです」

大人同士の会話は、具体性を帯びてきた。

「セックスの楽しみは、男であれば射精の快感ではないのですか？」

「性交によってお互いの興奮が高まって頂点に達する楽しみです。そのときに射精はありません」

ミズHには射精を伴わない快楽の頂点というものが、夫との経験からも想像することができなかつた。時を同じくしてミズHの夫ミスターSがサテイム

の案内で訪問した家庭でも、同じことが話題になり、こちらでは男同士がさらに突っ込んだ話になっていた。子白鳥星人も射精現象は人間と同じようにあるのだが、結婚が決まると結婚生活が始まる前に精子を登録することになっている。それがすむと男たちはいわゆる去勢処置をする。そして結婚して後のセックスライフは、そのつど男の方が幻想を高める薬を用いて、夫婦互いにその世界を満喫するのだそう

だ。

そこには前戯もファックもあるし、望めば何時間でもその世界に遊ぶことができるのだそうだ。ただし薬を飲まなければ、性欲そのものが起きないということであつた。

一方女の方は普段は性欲を抑える薬を服用するか、夫婦として適当なペースで楽しむかどちらかにするのだそうである。何とミスターSが訪ねた夫婦は、

ミスターSやパートナーのサテイムの目の前で、セックスを実演して見せるということになった。そのオープンさにミスターSは仰天したが、サテイムはそれほど驚いたようすを見せなかつた。

夫婦は、着ているタイツを何の躊躇も無くさつさと脱ぎ捨てた。男は、ピンク色の錠剤を一粒水なしで飲み込んだ。二人はおもむろに抱きあい、地球人たちと似たような感じで前戯を始めた。地球人に比

べると極端に頭でつかちの彼らの抱擁は、ミスターSにとってはひどく不具合そうに見えたが、本人たちは不具合ではないようだ。口づけもあり、男の性器は勃起している。人間のものどさして変わらぬ大きさである。二人は、そばで見ているわれわれのことなどまったく眼中に無いかのように振舞った。

姿は違っているも人間の性戯を見ているような感覚に襲われたミスターSも興奮を誘われた。しかし

サテイムはそうでもないらしく、彼のタイトスの股間の辺りを盗み見ると、変化を示していなかった。

これでは、この星ではポルノ映画のようなものは必要ないのだと、ミスターSは思うのだった。

そのうち二人は同時に頂点を迎えたような感じの動きをしてから体を離れた。そして何事も無かったようにタイトスを元通りに着たのだった。そして、
「これが私たちのセックスライフの姿です。私たち

は毎日このようにして楽しんでいきます」

と、恥じらいのかけらも無いように言うのだった。

「薬を飲むとどんな気分なのですか？」

「それは、いい気分ですよ。そして吞んでしまうとその気分は頂点を迎えるまで止まりません。しかしこの薬は結婚した者にしか手に入れることが許されていません。結婚した者であれば、自分の結婚相手でなくても、結婚している者となら誰とでも楽しむ

ことができるのです」

自分たちの子供という概念が無いこの星では、いったい結婚は何の意味があるのだろうか。この疑問に対して、

「そうですね。毎日セックスを楽しむことくらいですかね」

と何となく醒めた返事であった。地球ほどの結婚の意味は無くなっているのだろうか。もつとも地球で

も、離婚率は五十パーセントを超えているのだから、子供の問題がなくなったら、この星と同じになるのではないかとミスターSは考えさせられるのだった。

俳優のミスターQはパートナーのクワンツmとあちこちを視察してまわったが、亡くなったバイオリニストのミズF、水泳選手のミスターOなどと同じように、視察結果にはやや肩透かしのような思いを

味わった。

ここには人生の物語を見て感動するという風習が無かったのである。ミスターQが、演劇や映画の素晴らしさを力説し、そのためには高い入場券を徹夜で並んで手に入れてでも見たいものなのだと一生懸命に説明したのだが、そこで観客が体験する気分や感動は、すべて自宅で寝椅子に横たわってそれぞれの自分が味わいたい気分を呼び起こす薬を飲めばい

いじやないかというのである。どうしてわざわざ切符を手に入れて、出掛けていって、長い時間それらを眺めていなければならぬのかというのだ。

苦難を乗り越えてやっとな問題を解決したときの満足感や、美しい状況を見たときの爽やかな気分などは、それらを味わえる素晴らしい薬があるというのだ。

また、理不尽なことに対する怒りや、懐かしい人

に再会したときの喜びというものについては、どんな気分なのか理解できないというのだった。この星でも子供は喧嘩するらしいが、大人になるまでに完全に抑制できるようになるということだ。そのような大人になったら、自分が子供時代の気持ちや経験は忘れ去られるのだろうか。

百四十五才の小説家ミズMは、さらに意外なこと

を聞いた。この星では小説というものは禁じられて
いるのだそうだ。それはすでに数千年間守られてい
る制度で、小説とか物語といったものの概念自体、
すでに存在しなくなっているというのである。

ミズMは、何故禁止になったのかを知りたかった。
彼女はパートナーのマーラーfに頼んで、歴史博物
館に行くことにした。それは宇宙空港からは遥かに
遠く、長い旅が必要だった。

そこでミズMは、疑問に対する答えを得ることができた。しかし納得できたという意味ではない。

この星でも数千年前までは、小説とか演劇とかいったものは非常に盛んだったらしい。しかし、数千年前というのは、子白鳥星の大改革が進められていた時期であった。そして、その方向性について激論が続いていた。会議だけでなく著述家たちは小説や演劇や論文で持論を盛んに世に発表していた。ある

方向が決まつてそれに向かつて進み始めても異論を唱えるものが後を絶たず、彼らはあらゆる方法で賛同者を求めて活動を続けた。そしてついに、そのような反対意見を述べることを禁じる提案がなされ、その議場に火を放つ事件が起こるほどの騒ぎがあつた。

それは前後五十年以上まとまらなかつたが、結局禁止の意見が勝つて、それ以来今日に至っているの

であつた。

その後も禁書が秘密裡に出回るなど百年くらいは、そのような地下的な運動がおさまることにはなかつた。しかしその間に、そのような書物を書いたり、出版したりしたものが処刑されるといつた恐怖の時代を経た。経てようやく、大改革の方向性は一本に統一されたのだった。そして五千年以上の時を経て今日、地球からの視察団が目になっているような子白鳥星になつ

たのである。

それが、彼らが一万年進んでいると自負する今のこの星の世界であることを思うと、ミズMは、博物館を出てからもパートナーのマーラーmには言わなかったが、地球もそのようにしたいとは思わなかったのである。

国会議員で視察団長を務めているミスターYはパ

トナーのエンfと子白鳥星の総裁ともいえる立場の人物と会談した。ミスターYが、たしかに子白鳥星は地球に比べると遥かに先を行っているように見えるが、そのすべてが理想的な状態になっているとはいえないのではないかと、これまでの視察で感じたことを直接ぶつけた。総裁はしばらく考えてから、おもむろに話し始めた。

「やはり外部者の目には、われわれが抱えている問

題点がよく見えるようですね。私たちの長い歴史は、すべての人の幸福を追求する歴史でもあったのです。そのために必要な科学技術は必ず作り上げ、医学も極限まで進歩させました。国の制度や家族の形にも手を加えました。

それ以前は、といつてもわれわれの歴史でいえば数千年以上前のことですが、ちようどお国の状態とそつくりの時代があつたのです。

芸術家たちは競うようにより刺激的なパフォーマンスを追及し、人々の生活様式もそれまでのものに飽き足らなくなつて次々と新しいものを求めるようになっていきました。しかしそれらは仮に達成できても、踊り手が、何十万人を熱狂させ喝采を浴びても、演技を終えて家に帰ればたった一人で孤独に襲われてしまふといひます。また人気の高かつた芸術家が、他の新しい芸術家に人気をさらわれると、自分に絶

望し、孤独に耐えられずに自殺するというケースも後を絶ちませんでした。一方、人気者を妬んでその家に火を放つという犯罪もあつたそうです。

いわゆる成功者の生活はどんどん豊かになり、そうでない者との格差はひろがるばかりでした。そこで私たちの祖先は『みんなが幸せ』を旗印に、進化を求め始めたというわけです。

その数千年の歴史は見事な成果を遂げてきました。

ところが、視察団の皆さんがお気付きのように、われわれの進化は行き過ぎていきます。生きる意味は薄れ、死を楽しみに待つような人生を送るようになってしまったのです。

だからこの星には、視察団の皆さんが折角用意してこられた芸術やスポーツや家庭生活の喜びといったものを、享受するどころか理解する者すらいなかったと聞いています」

「いや、われわれも地球で行き詰っているさまざまな問題を解決するヒントを求めて視察に来たのです。学ぶべきことは大いにありました」と答えるしかなかつた。

このようにして視察はほぼ予定の期間を終えた。視察団員たちはそれぞれの視察結果を報告書にまとめ、さらに全員による報告会も連日開かれた。

そこで語られたのは、争いが無い、貧困が無い、病気が無い、高齢化による人生末期の問題が無いなど、地球上の問題が克服されている点を評価する一方、それらの裏返しともいえる問題を口にする視察団員が多かった。みなは『地球より一万年進んでいる』ということの意味を考え直させられたのである。

子白鳥星離陸

地球からはるばるやって来た視察団は、九人の仲間を失うという大きなアクシデントがあつたにもかかわらず、残つた十七人で予定通り子白鳥星の視察を終えて、地球に帰還することになつた。

ここにやって来たときと同じように、視察団員と乗組員全員の五十七人は、宇宙空港のホールに勢ぞ

ろいした。視察団員たちを長い期間サポートしてきた子白鳥星側のパートナーたちも勢ぞろいしている。ミスターZとのことで死亡したザンドナイfに交代して、ほんの短い期間だがミスターZのパートナーとなつたザードルmもいた。

いま視察団員たちは、パートナー全員が六十四才であることを知っている。かれらは全員六十五才の誕生日を迎えると同時に死ぬことになつていふのだ。

しかし、その姿は死が近いことを嘆くような雰囲気を持ってはいない。もちろん高齢のために衰えていくということもない。これが何千年もの間に完全に定着した六十五才制度というものなのだ。地球人たちはこのことに感動さえしたのだった。

来たときと同じようにごく簡単な送別式があった。地球人たちは、世話になったパートナーたちと別れる感慨を持ったが、パートナー達からは、別れると

いう感慨を見て取ることは出来なかつた。

視察団員たちは、それぞれのパートナーと握手してから宇宙船ヒナギク号に乗り込んだ。子白鳥星人たちは、特に名残を惜しむといった雰囲気もなく、ホールから散っていった。視察団員の方を振り返って手を振ったりする者もいなかつた。

ヒナギクは、無事子白鳥星を離陸した。宇宙船の

速度が超光速になるまでの間、乗組員も、視察団員も自室で自分の体をベルトに固定して、窓からレンガ色の星が遠ざかるのを眺めていた。四箇月前に、このレンガ色の星に近づいたときに見たのと同じ眺めだが、いまは誰もがさまざまな思いに耽っているのだった。

九人が死ぬというアクシデントが発生したとき、このまま視察を続けるかどうか検討中であるという

連絡を地球に送ったが、その返答が出発した後になつて届いた。内容は、『そちらの判断に任せる』というものだった。交信に要する日数を考えれば、当然の内容であつた。

こんどは、子白鳥星を飛び立って地球に向かつた旨を送信したが、それが地球に届くころヒナギク号はすでに地球のすぐそばまで到達しているはずである。もちろん、太陽系内に入れば、もつと短時間の

交信が可能になるので、帰還に必要な具体的な交信について心配はない。

九十日間の帰路、船内は往路でのような活動的な動きは、視察団員たちにはなかつた。ミスターZがいないことも原因だったかもしれない。視察団員たちは、子白鳥星で見してきたことについて、話し合うことがほとんどであった。それに、視察団員たちに

は詳細な報告書をまとめるという仕事があつたことにもよる。それと九人の死は誰にとつても、大きな衝撃であり、喪に服していたというわけではないが、誰もはしやぐ気持ちにはなれなかつたのである。

静かな、しかし順調な飛行は続いた。あと数時間で第八宇宙ステーションというときに、地球からとんでもない連絡が飛び込んできた。地球は確認できるがまだ小さな星にしか見えないときのことである。

船長の緊急放送が船内に流れた。すでにみんなは自室でベルトを付けている。

第八宇宙ステーションで

「重大なお知らせです。地球では核戦争が勃発して、地球上の多くの場所が高濃度の放射能に曝さ

れているということです。この連絡は第八宇宙ステーションから発信されたもので、宇宙ステーションでも地球との交信が思うようにできない状態だそうです。われわれはとりあえずこのまま第八宇宙ステーションまで行きますが、そこで待機することになります。皆さんはそのまま第八宇宙ステーションに着くまでしばらく自室でベルトを着けたまままでいてください」

核戦争が勃発というが、それ以上詳しい説明はなかつた。この何百年間というもの、局地的な紛争は絶えなかつたが、全世界を巻き込むような大戦はなかつた。十箇月前に地球を出るときも、中東をめぐつてきな臭い状況はあつたが、それとて何百年も続いていることで、特に日本人としては過激な勢力のテロの心配と、エネルギー問題に影響が出るくらい
の認識でしかなかつた。

この十箇月、いや地球では十年の間にいったい何が起きたというのだろうか。視察団員たちにとっては寝耳に水としか言いようがない。

それだけでなく、その全面核戦争と思われる状況の中で、日本はどうなっているのだろうか。なんとなく対岸の火事のような感覚で受け止めた者が多かったが、よく考えてみると、本当に全面核戦争であればその放射能の影響は日本だけが免れることはあ

りえないし、それどころか日本がその戦争にかかわっていないという証拠は何もない。思えば、平和憲法を時代に合わないとして変えようとする勢力の動きも大きくなっていた。

そのあと船長からの放送は何もなく、宇宙船ヒナギク号は音もなく第八宇宙ステーションに到着した。出発のときにあれほど惑星の眺めを楽しんだ視察団員たちは、誰一人として、それら惑星のそばを通過

したことさえ気がつかなかつた。第八宇宙ステーションに降り立つと、目の前に地球が大きく見えている。宇宙船を降りた者たちは先を争うように、地球がよく見える場所に駆け寄つた。ここから見る地球は出発のときとさして変わらない姿を見せている。ただ雲に覆われている部分が非常に多いようだ。誰も口を開かずに、地球の姿を見つめている。

一同は第八宇宙ステーションの広間に集められた。

地球の状況や、みんなのこれからの行動について話されるのだ。

宇宙ステーション内も緊張に包まれている。第八宇宙ステーションの責任者が壇上に上がった。

「みなさん、子白鳥星視察大変お疲れ様でした。みなさんも大変なアクシデントに見舞われたようです。いま地球上では信じられないことが起きています。全面核戦争です。」

それはほんの二十日前、正確には日本時間の二千五百五十五年五月十二日の未明、イスラエルがイランの核施設に核弾頭付きのミサイルを打ち込んだのが始まりでした。イランは即座に応酬し、テルアビブに核攻撃を加えたのでした。イランの報復の一時間後には、ペルシヤ湾にいたアメリカの空母から、小型の核爆弾を搭載した戦闘機が発進して、イランの首都と主要基地に十数発の核爆弾を打ち込みまし

た。

その後もイランは抗戦しましたが、イスラエルとアメリカの二十数発に及ぶ核攻撃で、イランは壊滅したと伝えられています。これで一旦核爆弾の応酬は止まりましたが、パキスタンのあたりから飛び立った爆撃機がニューヨークに核爆弾を投下したのです。直ちにアメリカはパキスタンにも数発の核爆弾を打ち込みました。

核爆弾の応酬は、いまのところそれで一段落して
いますが、その地球に今帰っていくということは問
題があるので、しばらく地球および日本の情報を集
めてから、今後どうするかを考えるべきです。

いまこの第八宇宙ステーションには常駐職員二十
名と、核戦争直前に来たアフリカからの観光客十五
名、それにいま到着されたあなた方四十七名の計八
十二名がいます。この状態で、地球からの補給がな

くても約一年間は暮らしていけます。

第一から第七までの宇宙ステーションも、地球から孤立した状態となつていきます。それぞれしばらくは生活していけますが、いずれは地球に戻らないわけには行きません。充分に情報を得て、今後の対応を考えていくことになります」

戦争の火種は中東を中心に数百年に亘って消えることがなかった。しかし一九四五年に終結した第二

次世界大戦以降約六百年間、何とか全面戦争は回避してきた。今回も全面戦争とはいえないのかもしれないが、合計二十数発の核爆弾が使われたということは、世界中が莫大な影響を受けることは間違いない。

誰かが核のボタンを押したら、このような事態は避けられないであろうということは、世界の常識となっていたはずである。その常識が、核を抑止力と

して誇示しあうだけで、実際に使うことはないと考えられてきたのであった。

第八宇宙ステーションでは、地球の情報を懸命に収集しようとしていた。これまでに集められた日本の状況をまとめるとおよそ次のようなことのようにだ。

この二週間というものの国土は厚い雲に覆われ、連日のように高い放射線を含んだ雨が降り続けている。

かなりの国民は核シェルターの中に退避しているが、シェルターに収容できるのは全国で数十万人と、ごく限られた人数に過ぎない。国民のほとんどは、雨に当たらないように気をつけて暮らすしかないということである。すでに被爆症状を確認された者もかなりの数に上っている。これは日本だけでなく、直接被弾しなかった赤道から北緯四十度あたりまでにあるすべての国や地域に及んでいる。

この人類史上最大の過ちに対して、すでに各国は対策を話し始めている。対策は、被弾した国や地域に対するものと、地球上を広く覆っている放射能帯に対するものとである。しかし、現段階では、何一つ有効な対策はなされていないだけでなく、方法そのものが見つかってもいない。

宇宙ステーションに足止めされている人々は、地球を眺めながら時間を過ごすしかなかった。ここで

もこれから何をすればいいのか、これといった策は生まれていない。青く美しいはずの地球は、灰色がかった厚い雲に覆われていて、いまも青く美しいのは南半球の緯度の高い辺りと、北極付近だけである。

視察団員たちの間には、もう二度と地球には戻れないのではないかという絶望感が広がり始めていた。中には、もう一度子白鳥星にいつて、そこで住まわせてもらおうかと言ひ出す者さえいた。そんなこと

を言つても、宇宙船ヒナギク号には、もう一度子白鳥星まで飛行する燃料はない。宇宙ステーションにもそれだけの燃料ストックはない。

テラフォーミング計画が進められている火星や、すでに人間が活動を始めている月などに行くことはできないかと言ひ出す者もいる。

いずれにしても、それらはそれ相応の準備なくして実現できることではない。宇宙ステーションはあ

くまでもステーションに過ぎない。ここには八十二名の人間一年分の備蓄食料があるというが、たかが一年分である。

これからどうするのかは、宇宙ステーションにいる者たちにとっては、一刻を争う問題である。とにかく、地球での対策の進展に期待するしかないというのが現実的な唯一の選択肢であつた。

視察団員たちは、日に日に灰色の雲が広がってい

くように見える地球を眺めているだけであつた。

無為のまま日は過ぎていく。地球からは視察団員たちがどうすべきかというようなことは何も言つてこない。おそらくそれどころではないのである。度重なる宇宙ステーションからの催促に、日本の基地から何枚かの衛星写真が送られてきた。いずれも拡大されていて、被弾した街の様子がはっきりと写

っている。

ニューヨークは摩天楼の残骸のようなものが突き立つた骨のように残っているが、あとは廃墟と化しているように見える。イランと見られる写真は三枚あつたが、いずれも街らしい姿はまったく無くなつていて、広大な範囲が砂漠のように見える。二十発以上の核爆弾によつて、文字通り完全に国が消えたかのようなのである。

イスラエルと見られる地域の写真では、テルアビブがほぼ砂漠化しているのが写っている。写真には何のコメントも添付されていない。これだけを送るのが精一杯だったのだろう。

宇宙船ヒナギクに待機すること一箇月、日本の宇宙基地から連絡が入った。日本から初めての視察団への連絡である。それによると、日本では放射能雨による強度の汚染から国民の生命を守るために懸命

な努力が続いている。あと三箇月もすればある程度
の目途がたつものと思うので、その時期になったら
帰国することを考えてほしい。

そして、いまがんばっている日本人とともに、こ
の難局と戦ってほしい、というものであつた。

視察団員たちは、決して楽観できるような連絡で
はなかつたが、宇宙の放浪者になつてしまふのでは
ないことを知って、一応安堵した。

しかし、この時点ではまだ、自分たちの家族や、知り合いたちがどうなっているのかはまったくわかっていない。それに、核爆弾の応酬という信じられないような事態は、本当に収束したのかも心配であった。

三箇月を過ぎても日本の宇宙基地から新たな連絡は来なかつた。視察団員たちは、地球の状況がさら

に悪化しているのではないかと不安を募らせた。そのころには、八つの宇宙ステーション間の交信も盛んに行われて、お互いの状況はよくわかるようになっていた。

いずれの宇宙ステーションでも地球からの情報はなく、八つの宇宙ステーションは、まさに宇宙に孤立した八つの小島となっていた。

第一ステーションでは、核戦争直後に避難してき

たアメリカ人たちが三百人以上も滞在していて、他のステーションで少しづつでも避難民を引き受けてもらえないかと言ってきた。第一ステーションは、八つのステーションの中では最も大きく、収容可能人員も数百人であるが、長期滞在となると話は別である。

八つあるといつても、第四、第五、第六の三ステーションは、研究用の小さなステーションで、滞在

している研究員以外に余分の人数を引き受ける能力はない。

また第七ステーションは大型であるが、物資保管用のステーションで、人間が生活出来るようには作られていない。ただし、ここに保管してある物資で、各ステーションの生活期間はかなり延長可能となる。もちろん生産しないのだから、いずれにしても有限であることに違いはない。

また第二ステーションには宇宙観光に来ていた三十人ほどのアラブ人観光客が足止めされている。このステーションは収容定員五十人ほどの中型である。第三ステーションは修理工場としての機能を持っていて、宇宙ステーションや移動ロケットの点検修理が出来るが、ここも多くの人間が長期間生活するステーションではない。

そしてわが第八ステーションは、ステーション職

員のほかに子白鳥星から戻ってきたヒナギク号の乗組員三十人、視察団員十七人のほかに、このステーションの常駐職員二十人、先にも書いたアフリカからの観光客十五人の八十二人がいる。第八ステーションは比較的大型で百五十人くらいの生活が可能である。

このような各ステーションの状況であるが、これから先どうなるのか見通しがないまま日が過ぎてい

った。

日本からの連絡は、三箇月したら云々という連絡以降一切なくなってしまった。地球全土がとてつもない状況に覆われているときに、わずか数百人にも満たない宇宙ステーションのことなど考えている余裕はないのであろう。とくに核戦争直後に自分たちだけ地球を脱出した、第一ステーションのアメリカ

人三百人については、非難されることはあつても考慮してもらおうという方が無理であろう。

各ステーションでは長期化に備えて、物資の節約が始まっていた。視察団員たちに、子白鳥星に向かうときのよような活力溢れる気持ちはすっかり失せて、灰色の雲に覆われた地球を眺めるだけである。

第八ステーションでは全員が一堂に集まって食事をしているが、その食事にさえ出てこない者が増え

始めていた。

そんな時、地球脱出をしてきたアメリカ人のコメントが入ってきた。彼らによると、核爆弾の応酬は二、三発で終わるはずだと踏んでいたらしい。というより、イスラエルがイランに打ち込んだ一発で片が付くと思っていた者が大方だったらしい。

しかし、イランの報復があり、パキスタンあたりからアメリカ本土への核爆撃に及んで、アメリカが

二十発以上もイランとパキスタンに打ち込んで、脱出した者たち自身、ほとぼりが冷めたら帰れるという予測が狂ってしまったというのだ。

当初の見通しのように二、三発で終わっていたら、しかもアメリカ本土への爆撃もなかったら、ほどなく自国に帰還できると考えていたからである。それにして身勝手な三百人である。どのような三百人なのかみな知りたかったと思つた。

しかし、勿論コメントの中には、自分たちがどのような三百人なのかは触れられていなかった。

ヒナギク号が第八ステーションに着いてから四箇月ほど経過したとき、物資を満載した無人の貨物ロケットが第七ステーションに向かったことが地球から交信されてきた。まもなく第七ステーションの軌道に入った貨物ロケットがゆつくりと接合するため

に近づいてきたが、第七ステーションではその貨物ロケットから強烈な放射能を感知した。

大変な状況の地球から、しかもおそらく大変な苦勞をして宇宙ステーションのために発進してくれた物資であるが、この放射能では受け入れるわけにいかない。第七ステーションの判断で、貨物ロケットの着船は拒否された。そのためせつかくの物資であったが、貨物ロケットは宇宙ステーションの軌道を

それで宇宙の果に飛び去って行った。第七ステーションではその処置をすぐに地球に連絡したが、それに対する返答は何もなかったそうだ。

貨物ロケットが帯びている放射線量の高さから、地球上はとても人間が住める状況ではなくなっている可能性があるという意見も出てきた。

「しかし、貨物ロケットを発射することが出来たのだから、人間は生きて活動しているのではないか」

「あの貨物ロケットは半年に一度自動的に第七ステーションとの間を往復する無人の定期便で、セットされた状態が破壊されていなければ、人による操作は必要ないはずだ」

「じゃあ、地上では人間は死に絶えたのだろうか」
このような絶望的な会話が交わされ始めた。

行動する第八宇宙ステーション

第八宇宙ステーションでは、十七人の視察団員たちが、何もせず、食料が尽きていくのを待つだけの生活はしたくないと考え始めていた。

自分たちはこれからの地球をどうするかという大きなテーマを持ってはるばる子白鳥星まで行ってきた。その視察結果をもって地球に戻り、人類のため

に新たな取り組みを考えていこうという矢先に、帰還を目前にしてこの事態である。手をこまねいてただ時間を費やしているわけには行かない。何らかの行動を起こしたいと考え始めた。

そのなかの代表的な意見は、第八ステーションに装備している三人乗りの小型ロケット「ツバメ号」で、誰かが地球の様子を見に行くというものだった。しかし一旦地球に行くと、なんとか宇宙ステーション

ンに戻ってくることができたとしても、あの貨物ロケットのように強烈な放射能を帯びてこの宇宙ステーションに戻ってこられても、受け入れられなくなる可能性がある。

「私が行くことにしてもいいです。しかし一人ではロケットを動かせないので、あと二名の方を募る必要があります。ここから見た感じでは、北極か南極付近には灰色の雲がないから、そこから地球に入つ

ていけば大丈夫かも知れない。それでも戻ってこれなくなったら、地球に残ってあちらで宇宙ステーションとの交信の努力をすることにしますよ」

こう切り出したのは、視察団長の国会議員ミスターYである。

「そのような任務なら、むしろ若い先短い私が名乗り出るべきでしょうが、私では足手まといになるだけですね」

こう言ったのは百三十才の小説家ミズMだ。

それを聞いてふたたびミスターYが言った。

「いや、そういう誰が犠牲になるかの問題ではなく、これはいま宇宙ステーションにいる者全員の生死に関わることです。私はたまたま視察団長をさせてもらっていますから、その立場から責任がありますし」

「私も行きましょう」

と名乗り出たのは、二十六才の外科医ミズDであつた。

「私は、外科医ですが放射線医療についても知識を
持っています。今回の最大の問題は、特に日本にお
いては、放射能だと思いません。ぜひ私に行かせてく
ださい」

かくして、ミスターY、ミズDそれにロケツトの
操縦を担当する乗組員のミスターRの三人が決定し

た。三人の任務は、とにかく日本の状況を把握して宇宙ステーションに孤立して、地球に戻れずにいる、さまよえる視察団員たちに見通しを与えることである。八つの宇宙ステーション全部の期待を背負って三人は出発した。

混迷の地球に潜入

宇宙ステーションから地球までは僅か数時間の旅である。第八ステーションを飛び立つた小型ロケットツバメ号は、間もなく地球の軌道を回りながら、灰色の雲がないところを見つけて大気圏に突入するチャンスを狙った。近づいてみると灰色の雲は思った以上に厚いことがわかった。

このとき既に、機外に取り付けられた計測器はか

なりの放射線量を示している。しかし南北両極の上
空は、まるでオゾンホールのようにすっぽりと晴れ
の領域となっている。そこから見ることもできる北
極海は、昔からよく見慣れたままの形や色をしてい
る。氷に覆われているらしいことも変わらないよう
だ。

ミスター^②の巧みな操縦で、ツバメ号は北極の晴
れ間から大気圏に入り込んだ。晴れのエリアは狭く、

周りは厚い灰色の雲が密集している。その層の厚さは地上一万メートルあたりから千メートルくらいまで垂れ込めている。その下は雨が降っているようである。ミスターは北海道の宇宙基地に着陸を試みることにした。視界が非常に悪い中、レーダーを頼りの操縦である。その間再三地球基地と交信しようとしたが、電波は発信されているはずなのに、地球からの返答は何もなかった。

雨の北海道宇宙基地に無事着陸したのは、第八宇宙ステーションを出発してから七時間後であつた。

機外の計測器はここでも非常に高い放射線量を示したままである。三人は、まず食事を摂り、五時間ばかりの睡眠をとることにした。これから地上に降りたら何が起きるかわからないからだ。

地球時間の午前八時、三人は放射能防護服に身を固めて三重ドアを順次通過しながら地上に降り立つ

た。そこは一見ただの雨の空港といった感じであつたが、異様なのは宇宙ロケットが到着したにもかかわらず、人つ子一人見えないことである。

三人は、強い放射能雨に打たれながら基地ターミナルに向かつて歩いた。約五百メートルを歩く間、何度も稲光と雷に遭つた。そういえば飛行中も稲光が縦横に走るのが見えていた。

ターミナルの真下まで来て、大きな窓を見上げる

と、なんとそこには人がいるではないか。何人もの人が三人の方を見下ろし、あるものは手を振っている。彼らは一切外に出られないでいるのだろうか。

窓の中の一人が、さかんに左の方に進めというように合図している。三人はその合図に従って進んだ。そこには大きな入り口があった。三人が近づくと、ドアが自動的に開いた。しかしすぐその中にもがっしりしたドアがある。三人はとりあえず最初に関

たドアの中に入った。すると開いていたドアが閉まり、突然壁と天井全体からもものすごい勢いでシャワーが三人に降り注いだ。それは五分も続いただろうか。ようやくシャワーが止まって静かになると。

「ツバメ号の皆さんようこそ。ただいま第一次除染をさせていただきました。このあと第四次まで同じような除染を繰り返しますので、ドアの開閉にしたがって進んでください」

視察団員たちが、一年以上前に地球を出てから初めて聞く地球にいる人間の言葉である。これにはある種の感慨があつた。二人は指示通りに除染を受け、五つ目の部屋では除染シャワーでぬれた防護服を乾かすための温風を受けてから防護服を脱ぐとようやく、基地の人々がいる部屋に入ることが出来る。

三人が最後のドアを入ると、中は広い部屋になつていて数十人とも思える人々が、拍手で三人を迎え

たのだった。

遙かな太陽系外の旅から第八宇宙ステーションに戻つて以来、地球には人間が生きているのかさえわからない状態が続いていたが、ここには、外の降り続く放射能雨のことを別にすれば、まるで視察団が出掛ける前と同じような日本人たちの姿があつた。

三人は応接室に通され、基地の所長以下数名の幹部職員たちと相対した。三人は、なぜ三人だけが地

球に帰ってきたのかを簡単に説明した。基地の職員からは、

「ツバメ号が近づいてきたとき、厚い雲を抜けて地表に近づいたあたりから、私たちははっきりと機影が認識でき、それが第八宇宙ステーションの小型ロケットツバメ号であることがわかりました。第八ステーションに子白鳥星視察団の皆さんが帰着していることは、当初のスケジュールと、判読しづらい電

波によつて何とか想像できていました。なにしろこの激しい放射能によつて、衛星を使つての通信は使用不能状態なのです」

「そうでしたか。申し遅れましたが私が視察団長のミスターYと呼ばれている者です。宇宙に出掛ける前は、国会議員をしていました大和太介と申します。というより、いまも国会議員のはずだと思ひますが。こちらが外科医でいらつしやるミズDで、地上での

名前は土井葉子さんです。放射能にも見識がおありとのことでこの偵察メンバーに入ってくれました。

そしてそちらがツバメ号を神業のような技術で無事ここに着陸させてくれた、子白鳥星行き宇宙船ヒナギクの乗組員のミスター²、本名天野瑠衣さんです」

紹介された二人は、丁寧に頭を下げた。それを受けて基地側のメンバーの紹介もあつた後、

「ということですが、これから日本の状況を視察さ

れるとのことですが、全国すべてこのことと同じような状況が続いています。

どのような方法で、何を視察されるかなかなかの難題です。国内の電話は通じております。しかし、回線は常に渋滞状態でなかなか通話に至らないといった状況です。また交通機関は全面的に停止していただきます。それは人々が外に出られないからです。ごく一部のここのような除染設備があり、防護服が用意

できるところの者だけが、必要最小限の外出が出来るだけです。食料は、最初の核ミサイルがイランに打ち込まれたときすぐに、十分な量のシエルター食が全世帯、病院、福祉施設、学校などに配布されていきますので、食に関して数年間は少なくとも飢え死にすることはありません。だから誰も外出せず、じつと家の中に閉じこもって事態が変わるのを、もし変わるとしたらですが、待っているのです。ただ

個々の家で人々が無事であるかどうかは確認されていません。

われわれも、すでに一年近くこの基地の中に閉じ込められたままです。ただし、それぞれの家族とは連絡が取れていて、ほとんどの皆さんは無事のようにです。しかし、四十人の職員のご家族のうち、数名の方は帰宅しないまま行方不明状態です。

実は街中には行き倒れた死体が処理されないまま

放置されているということです。だから、明るい照明に恵まれ、暖房や冷房も使える建物の中にいると一見安全が確保されているようですが、一歩外に出れば悲惨な状況で、しかもいつまで続くのかということを考えて、絶望的な気持ちになってしまいました」

「そうですか。少し状況が理解できて来ました。それでこの状況を脱するための方策はあるのです

か？」

「一応、政府の危機管理室を中心にいろいろ試みているようですが、いまのところ有効な手段はありません」

ツバメ号で地球に降り立った三人は、それぞれ家族のことを思い浮かべた。家族といっても出発時から地球上では十年以上経っているはずであるから、出発時の家族と同じとは限らない。それでも込み合

っているとはいっても、何とか電話することもできたであろうが、宇宙船ヒナギクにいる他の視察団員や乗組員のことを考えて、電話するのは控えた。

視察団長の大和大介が具体的な行動に触れた。

「私たちはとりあえず危機管理室に行きたいと思いません。ここから東京まで行く方法はありませんか？」

「ヘリを使ってください。操縦士をつけてご案内させます。危機管理室には私の方から連絡しておきま

す。今電話をかけても、なにしろ話に聞く電話の創成期のように何時間もの順番待ちですから。もつともホットラインがあるところはすぐ連絡が取れるようです。がね。此処は危機管理室とホットラインが繋がっていませんので。まあ、北海道庁経由などいろいろ試みてみますのでお任せください」

「お願いします」

三人が再び防護服に身を固めていると、

「私がヘリでご案内する平林知子です」

と言いながら近づいてきたのは、まだ二十代かと見える美しい女性であった。視察団が出発したとき彼女はまだ中学生くらいだったのだろう。

彼女はすでに防護服をまとっていた。四人は基地職員に見送られてヘリコプターデッキに出た。外は相変わらず土砂降り状態である。どうしてこんなに雨が続くのだろうか。

四人はデツキに停まっている六人乗りのへりに乗り込んだ。へりのエンジンがかかる前に土井葉子が平林知子に訊いた。

「この雨はずつと降り続けているのですか？」

「今の降りはまだ三日目くらいですかね。降っていないときもあります。雲は厚くて陽が射すことはこの一年一度もありません」

へりは爆音を轟かせて、ふわりと空中に浮き上がり、方角を南西にとって飛行を始めた。機内では視察団員たちはみな地上の様子を食い入るように見ていて、誰の口からも言葉は出なかつた。へりは直ぐに太平洋側に出ると、五百メートルくらいの低空で海岸線を飛んだ。

約三時間で東京上空に達した。ビル群は元のままだが、人の姿も車の動きも見えない。異様な大都会

の風景である。

へりは直接総理官邸の屋上に着陸した。三人を降ろすとすぐに飛び立とうとしたが、平林知子は思い直したようにエンジンを切って、三人とともにへりから降りた。

「危機管理室で、私も何らかの情報を持ち帰りたいと思いますので」

平林知子はこう言って、三人と行動をとることにするこ

とにした。

ここは雨が止んでいたが、この官邸屋上の環境放射線量は相変わらず高い値であることが、土井葉子の携行している計測器が示している。屋上には誰も迎えに出ていなかっただが、北海道宇宙基地と同じように四層の除染室を通過すると、最後の扉の中に菅野総理自らが出迎えてくれていた。菅野総理は、まず子白鳥星視察の労をねぎらい、帰還の段になって

地球がこのような未曾有の、というより壊滅的ともいえる危機に直面しているため、宇宙ステーションに足止めとなつてゐることを詫びた。

三人だけが北海道宇宙基地にやってきた経緯については、すでに北海道基地から入電してゐるらしく、概略は承知してゐるようであつた。

応接室には、総理のほかは何人かの閣僚も同席して今後のことについての話し合いが始まつた。

まず、危機管理担当の細山大臣が現況をかいつまんで説明してから、付け加えた。

「申し上げたように現段階では有効な打開策というものはないに等しいと言っていていいでしょう。しかし、これから試みることになっている対策はあります。それはこの強い放射能を帯びた厚い雲をすべて吸い取り、フィルターで放射性物質の微粒子を集めて、それを宇宙空間に廃棄するという案です。然る後に、

放射能を含まない雨を人工的に誘発して、すべての陸地に堆積した放射性物質を海に洗い流します。さらにその後全海水をフィルタリングして集めた放射性物質を宇宙に廃棄するといふものです。そのスケールは地球規模ですから短期日にできることではありませんし、一国でできることでもありません。専門家の試算ではすべてがきれいになるまでに七十年必要だといっています」

別の大臣が続けた。

「もうひとつ別の案も検討されています。それは一言でいうと地球全土にばら撒かれた放射能を閉じ込めてしまうというものです。もともと濃縮されていていた核物質が分裂によつて拡散したわけですから、何らかの方法で再濃縮するというのです。核分裂反応は非可逆的反応とされてきましたが、再濃縮が不可能でないという説をとなえる研究者のグループがあ

り、彼らによると、さきほど細山大臣が説明した方法よりも時間がかからないだろうと言っているのです」

ここまで聞いていた大和次郎が言葉を挟んだ。

「つまりいかに遠大であろうとも、この状態をもとに回復しようという考えが、地球上では共通認識と
なっているのですね」

「もちろんです。このまま諦めて人類滅亡を、手を

こまねいて待つという考えをする国はひとつもありません」

菅野総理はことさらに語気を強めてきつぱりと言
い切った。

「そもそもこの事態を生むにいたった戦争は収まっ
ているのですか？」

「収まっています。というより火種となったイラン
は、おそらく全人口が消滅していますし、報復の被

弾を受けたイスラエルとアメリカは、すでに今後一切核兵器を使わないことを宣言しており、保有している核爆弾はすべて廃棄することも世界に約束しています。それに対して、パキスタンあたりに行くと思われる反米勢力、つまりアメリカがテロ集団と呼んでいる勢力からも、イスラエルとアメリカが宣言を實行したら、自分たちもそれに習うと言っています。そのほかの核保有国がどうするかは必ずしも不

透明ですが、世界の情勢からすると、おそらくロシア、フランス、イギリス、インド、中国、北朝鮮なども右へ倣えするだろうといわれています」

菅野総理は、深くため息をついてから、

「私たち人間は、ここ数百年の間核兵器廃絶の議論を続けてきましたが、結局地球を滅ぼしかねない結果を招いて初めて、結論に近づいたといえるのです。愚かなり人間といわざるをえません」

こんどは大和次郎が話し始めた。

「私たちは子白鳥星で、まったく争いのない世界を見てきました。ただしそれと引き換えに多くのものをなくしているように見えました。人間というものは本来、時には人と争うほどの激しい感情が人間を動かしているのです。その感情を百パーセントコントロールしてしまふと、もはやそれは人間とは言えないような気がします。激しい感情を争いに発展し

ないようにコントロールするのは、薬品や人間改造によつてでなく、理性によつてでなくてはならないと思ひました」

「いや、早く視察団の皆さんをお迎えして、詳しくお話を伺いたいものですな。しかし、まずは現状の打開です」

「話を戻しますと、細山大臣のお話でいくと、地球をきれいにするには七十年かかるということになり

ますね。その間人々はシェルター生活を続けるのですか？」

「いや、すでに月面生活で行っているような、すべての活動を屋外に出る必要がないように街全体を建物の中にしてしまう計画を始めています。空気、水、食料もその中で合成されたきれいなものが提供されます。まだそのような蟻の巣のような街の連続はごく一部、計画の二パーセントにもなりません、出

来上がっています。

われわれの計画では国民の生活の重要度に合わせ
て優先順位を決めて建設していきます。計画どおり
進めば、五年でほぼ完成する予定です」

「われわれは、いつ地球に戻ってくればいいのでし
ょう？」

「すぐにでもといえますが、多少の受け入れ準備を
考えれば三箇月くらいの猶予をいただければありが

たいです」

「三箇月というのは第八宇宙ステーションでも以前、一度聞いたような気がしますが……わかりました。

それでこの機会に、いま説明のありました、シエルター街の建設のようすを、それと人々の生活の様子をちよつと見ておきたいのですが、出来ますでしょうか？」

「もちろんです。ご案内いたしましょう。それに折

角ですからそれぞれのご家族にも会われたいでしようし」

「いや、それは結構です。宇宙ステーションのみんなも家族の安否も何もわからないままです。私たちが家族に会うのは結構です。それから、この状況になって国民の人的被害はどうなっているのですか？」

「雨が降り始めた当初は、どれほどの放射能を含ん

でいるかもわからなかつたため、その雨に打たれて被曝死した者がかなりにのぼりました。いま把握で
きている範囲で言いますと、そのような死者は全国
で数十万人です。当初は放置されていた遺体も、今
は殆ど火葬が済んでいます。しかし、その人数は直
接雨に打たれてそのままにしていたような強度の被
曝者で、出来るだけ雨に当たらないようにしたが多
少濡れたという者の中にも、被曝症状が出ているケ

ースがある」と聞いています。犠牲者の数はまだ増え続けると思わなければなりません。国民の避難場所をこの数箇月間第一優先で懸命に取り組んでおりませんが、なにしろ全国津々浦々のことですから、全然間に合っていないません。こうしている間にも被曝して命を落としている人たちがいるのです」

「これは、直接被弾していない日本のことです。被弾地域がイラン、パキスタン、イスラエル、アメリカ

カ東海岸ですから、わが国からかなり離れていてこれですから、中東やヨーロッパ諸国の被害はこんなものではないと思います。そのような状況にあつても、世界は英知を集めて地球を救おうと動き出しているのです」

「わかりました。これからは常に全人類的なものの考え方でいかななくてはなりませんね」

「ひとつお知らせしておきたいことがあります。宇

宙ステーションのひとつにアメリカ人三百人が避難しているということをご存知ですか。アメリカ当局は、将来いかなる改善が進んだとしても、彼らの帰還を認めないと言っています」

大和大介、土井葉子、天野瑠衣それに北海道基地所属のヘリコプター操縦士、平林知子の四人は別室で少し休憩を取ったあと、北海道から乗ってきたへ

リコプターでシエルター街の建設現場と、被災した街の様子を上空から視察するために出発した。今度は防災担当の能口英俊大臣が案内役として同乗した。すべて上空からの、わずか二時間足らずの視察であつたが、街には人っ子一人おらず、自動車の姿はたくさんあつても、動いているのはたまにしかなくつた。それを見て、能口大臣が説明した。

「彼らは、みな全戸に配布された防護服で移動して

いるのですが、目的地に着いたらすぐに水洗します。しかし皆さんが経験した総理官邸のような設備は整っていないので、除染は十分とはいえませんが。中には隣の家に行くのに防護服を着ないで走っていく者もあると聞いています。そういったことも原因となつて、すでに頭髪が抜けるなどの被曝症状が数多く報告されています」

長い列車もすべて駅に止つたままである。外は再

び雨が降っていた。そのなかで、唯一動いているのはシエルター街の建設現場であろうか、白い防護服に身を固めたたくさんの人々や重機が、通常われわれが見慣れた建設現場と同じように動いているのが見られた。

官邸に戻った一行は、再び何重もの除染ドアを通って、中に入った。

食事を済ませてから、北海道の宇宙基地に戻る。

食事といつても、出されたものは宇宙ステーションで出されているのと同じ錠剤になつてゐる総合栄養食三粒とコップ一杯の水であつた。

一年も二年もたくさん人間が生き延びるにはこれしかないのである。食事に同席した能口防災大臣も苦笑しながら、配られた錠剤をぐいと一秒ほどで飲み下した。そして、

「ビールを飲みながら、鍋を囲んで何時間も歓談す

る夢をよく見ますよ」

と言つて笑つた。

これから視察団の三人は第八宇宙ステーションに戻る事になつてゐる。

再び宇宙ステーションへ

大和 大介、土井 葉子、天野 瑠衣の三人は、一旦北海道基地に戻った後、燃料を満載されたツバメ号で第八宇宙ステーションに戻った。到着後は、大切な水を使って三人の除染をした。

そして三人はそれぞれミスターY、ミズD、ミスターRに戻ったのだった。

彼らの報告は、待っていた視察団員たちを安心させたり喜ばせたりするものではなかった。希望さえ

ほとんど無いように思えたのである。世界が英知を集めているという壮大な地球クリーニング計画でさえも、実現の可能性はとてにもわかには信じられなかった。

人類滅亡へ

それから地球とは交信のないまま、一年があつたという間に過ぎていったが南極の上空の僅かな青いホール以外は、あいかわらず厚い灰色の雲に覆われたままである。八つの宇宙ステーションでは食料が枯渇するまでに一年を切ったことが発表された。

宇宙ステーションでは、地球がどんな状態であつてもとにかく地球に戻るか、いまや地球もこの宇宙ステーションも同じ運命に曝されているのだから、

このまま運命共同体として生きられるだけ生きて、そのあとは宇宙の藻屑になるかが議論され始めた。

多くの意見は、死ぬにしても地球に戻りたいというものであった。

そして第八宇宙ステーションでは、全員が地球に戻ることを決めた。

いまは地球からの往復便が無いため、ツバメ号を含む三台の小型ロケットでピストン輸送することで、

全員を地球に運ぶことになった。それには第八宇宙ステーションの職員も含まれている。また、たまたま観光に来て足止めとなっているアフリカからの観光客もとりあえず日本に連れ帰ることになった。

それらはすべて北海道宇宙基地が日本側の受け入れ港となった。北海道基地に着いた者たちは、それぞれの出身地にヘリコプターで帰っていく。アフリカからの観光客については、日本に帰ってから考え

ることになった。

視察団の解団式は宇宙ステーション内のホールに、視察団員と乗組員、第八宇宙ステーションの職員、アフリカからの観光客も集まって簡単に行なわれたが、なんとも寂しい解団式であつた。

一年ぶりに地球に戻つた大和、土井葉子、天野瑠衣の三人は、シエルター街の建設など一年前よ

りも進んだ部分もあるが、人的被害は膨大な数にのぼっている現実を目の当たりにした。この間もちろん新しい生命の誕生は無く、被曝による死者は正確に把握することができないほどであった。

それでも、全国のところどころではシエルター街生活が始まっているところもあり、そこでは人々は現状に即しながらも毎日の生活を送り始めていた。しかしそれはまだ、合わせて何十万人規模であり、

話を聞きつけて多くの人々が殺到して、それを拒絶するシエルター内の人たちとの争いが起こり、その摩擦で多くの死傷者を出していることも伝えられていた。

それでも、この焼け石に水のようなシエルター街作戦は続けられていた。

一方、世界的に行われることが期待されていた地球全体の除染作戦は、まだ始まっていないかった。

それぞれので元に帰っていった視察団員たちが、無事家族達と再会を果たしたかどうかは定かではなかつた。もちろん視察に出掛けるときに、見送つてくれた家族や友人たちは十歳ほど年をとっているはずだし、彼らが今も無事であるかどうかはわからなない。いまは、だれも他人のことを気にかける余裕はないのだ。

ただ二人の小学生については、視察団長の大和大

介が付き添ってそれぞれの地元に行つたが、男の子の家族は地域を襲つた大規模な土砂崩れで行方がわからなくなつており、女の子の両親は、降り始めたばかりの雨の放射能に冒されて二人とも亡くなつてゐることがわかつた。その親戚を探すことも困難なため、大和大介は二人を引き取ることにしたのだつた。

このようにして視察団員たちは混乱の日本各地に消えていった。お互いの消息を確かめ合うこともままならない。

厚い雲は相変わらず全天を覆い、一週間のうち五日は強い放射能を含んだ雨が降り続いた。この雨によつて、いたるところで水害や土砂崩れが発生していたが、その復旧はいうまでもなく、救助さえもなされずに、被災者たちは放置された。この末期的な

状況を、人々はほとんど諦めていた。みな死が自分に訪れる日を待っているような心境になっていたのである。

殆どの生物が人間と同じ運命をたどった。放射能の影響を受けないというアブラムシだけが、地上を覆い尽くすかのような勢いで、動き回っていた。

数十億年後の地球

こうして一部で無駄とも思える抵抗を続けながら、人類は滅亡していった。

地球上では一部の昆虫や植物は放射能の影響を受けながらも適応して、地上で繁栄を続けた。地球に生物が誕生してから人類が滅ぶまでと同じくらいの億で数える年月が過ぎた地球には、太陽の光が降り

注ぎ、また程よく恵みの雨も降り注いだ。その雨にはもはや放射能は含まれていない。あらためて生物の進化が始まるのだろうか、何百万年後には、新たな人類が地球上に現れるのだろうか。

数億年前、進化を標榜していた人類は、人類の滅亡は巨大隕石が地球に衝突でもしない限りありえないと考えていた。それさえも火星や月のテラフォーミング計画で生き延びることができると考えていた。

ところが、何処かのバカの指が核のボタンに触れただけで、あっさりと滅亡への道を歩いてしまった。そのおかげで、子白鳥星まで出掛けて行ったが、視察してきた人類のあり方を報告する必要もなくなつたのである。

もし新しい人類が、地球上に生息を始めたとしたら、彼らはどのようになら生きていくことになるのだら

うか。しかし、そこにはかつて繁栄した人類の歴史も記録も何もない。

(了)

*この物語は、いうまでもなくすべてフィクションです。

登場人物一覧

以下に、この物語に登場する人物を書き出します
ので、読むときの参考にしてください。なお、Ⅱの
あとの「アクロン f」などは視察団員たちを案内し
た子白鳥星人です。カタカナ名の後の f は女性、m
は男性を表します。○内は年齢。

〔女性〕

- A 小学生 (10) || アクロン f
- B 体操選手 (18) || バツハ m
- C 国会議員 (25) || チェステイ f
- D 外科医 (26) (土井葉子) || ドホナーニ f
- E 画家 (28) || エネスコ f
- F バイオリニスト (28) || フォーレ m

- G 会社員 (29) || グリエール m
- H 主婦 (30) (*Sの妻) || ハルヴオルセン f
- I 農業家 (33) || イベール f
- J 環境研究家 (36) || ジョリヴェ m
- K 社会学者 (40) || コダーイ m
- L 歯科医 (43) (*Wの妻) || ラフ f
- M 小説家 (145) || マーラー f
- 平林知子 || 北海道宇宙基地の職員でへりの操縦士。

三人を総理官邸の危機管理室に連れて行く。

〔男性〕

- N 小学生 (11) || ナウマン f
- 水泳選手 (22) || オルフ f
- P 漁業家 (25) || パラデイス m
- Q 俳優 (29) || クワンツ m
- R 精神科医 (34) || ラフ m
- S 会社員 (36) (*Hの夫) || サテイ m

- T 政府職員(38) (*視察団のマネージャー) ||
 トセリ f
- U 作曲家(40) || ウンラート f
- V 都市研究家(42) || ヴァンエイク m
- W 内科医(42) (*Lの夫) || ウォルトン f
- X 小説家(45) || クセナキス m
- Y 国会議員(45) (*視察団長、大和大介) || ユ
 ン f

Z 人類学者(130) || ザンドナイフ。ザンドナイフの死後ザードルム

Q 天野瑠衣 || ツバメ号を操縦した、宇宙船ヒナギク号の乗組員

菅野総理 || 視察団帰還時の日本国内閣総理大臣
危機管理担当の細山大臣
防災担当の能口英俊大臣

ヒナギク号の乗組員

30人

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとつて頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前について

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 ≪お蓮・勘兵衛 悲恋の墓≫

第二話 ≪緑のトンネルで≫

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットのあゝ風景

「オセロ」の手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

- 1 弦楽四重奏団 a
- 2 弦楽四重奏団 b
- 3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

さまよえる視察団

2022年6月10日 初版発行

著者 山中與隆

編集発行 山中伶子

表紙素材元 illustAC

© Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>
